

台帳番号	19	福島県只見町(吉尾) [会津民俗館 蔵]	地方名	ジキボウ	
【見取り図】					【平面図】
<div data-bbox="858 1865 916 1982">           【正面図】 (説明図)         </div> <div data-bbox="954 1485 1337 1881"> <div data-bbox="1276 1731 1337 1859">軸頭</div> </div>					<div data-bbox="858 1216 890 1433">【側面図・船分図】</div> <div data-bbox="954 409 1241 891"> <div data-bbox="957 745 997 846">軸尻</div> </div>

資料所在地(施設)	福島県猪苗代町大字蚕養字大達沢乙3695-286(小椋隆夫)	地方名
調査台帳No.	38 原簿資料No 達沢-1	
文化財指定等		
		
<p>&lt;資料来歴&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・調査地 福島県猪苗代町大字蚕養字大達沢乙3695-286(小椋隆夫)</li> <li>・旧所有者 同地 故佐藤寅志</li> <li>・使用者 同地 佐藤濱之助(寅志の祖父)</li> <li>・使用年代 江戸末～明治初年</li> </ul> <p>&lt;現所有者小椋隆夫氏からの聞き取り&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・達沢の集落は享保3年に定住して以来約300年の歴史をもつ。</li> <li>・戸数当初は17戸、最大で45戸あったという。集落内は小椋姓と佐藤姓である。以前は相原姓もあった。</li> <li>・蒲生氏郷が近江から連れて来た木地屋が先祖である。</li> <li>・高森集落も同じ享保3年に定住して、小椋家の本家は高森の佐藤家である。</li> <li>・氏子狩りは蛭谷と君ヶ畑の両方を受けていた。</li> <li>・木地屋は農家からは嫁をもらわない。自分の母親は郡山市、中の入りから来た。</li> <li>・達沢と縁があるのは弥平四郎、藤巻の木地屋だ。</li> <li>・この資料は佐藤家が処分しようとしたものを小椋隆夫氏が譲り受けたもの。</li> </ul> <p>&lt;保存状態&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軸のみであるが、保存状態は良好。軸先端の金輪は欠損。</li> </ul>		<p>&lt;観察記録&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軸径49mmに対して軸長774mmと細身の軸で他の会津地方で調査したろくろと同じ特徴を示している。</li> <li>・前部軸受の手前がツバ状にくびれているのも会津の特徴。</li> <li>・爪は3本円環型、断面が9ミリ角の太い爪が隙間なく束ねられた状態で軸端に取り付けられている。小物おそらく椀類製作に特化した形状と考えられる。</li> <li>・金輪が欠損しているが、はめられていたと思われる箇所から推測して幅29mmほどのものと考えられる。</li> </ul>





資料所在地(施設)	福島県郡山市湖南町中ノ入 (小椋隆則 個人蔵)		
調査台帳番号	No.54	中ノ入	資料番号 ろくろ軸A
文化財指定等			



〔地方名〕 ろくろ軸

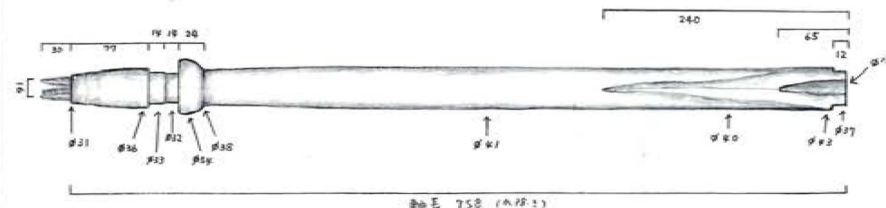
〔採集地〕 福島県郡山市湖南町中ノ入

〔製作地〕                      〔使用地〕

〔来歴〕 中ノ入集落の祖先は天正18年(1590)に蒲生氏郷の会津転封に伴い移住してきた近江の木地挽きと伝える。会津城下から耶麻郡黒岩村、南山御蔵入琵琶村を経て天明6年(1786)に安積郡三代村中ノ入に至る。中ノ入では明治の中頃まで木地挽きを業としていたが、その後衰退し大正末期に廃業。資料として残る手引ろくろの軸はそのころまで使っていたものという。大正14年当時の集落戸数は13戸、唐風作りの立派な玄関を備えた屋敷であったという。(「岩代木地山」2015小椋秀男 による。)

〔保存状態〕 かなり古く全体が黒く煤けている。金輪欠損、後部軸端が割れて欠落している等、破損が多い。

福島県 湖南町(郡山市)  
中ノ入 3<3軸 A  
[軸長 75]



基本データ＝ 軸長758mm 軸径38～54mm

#### ＜観察記録＞

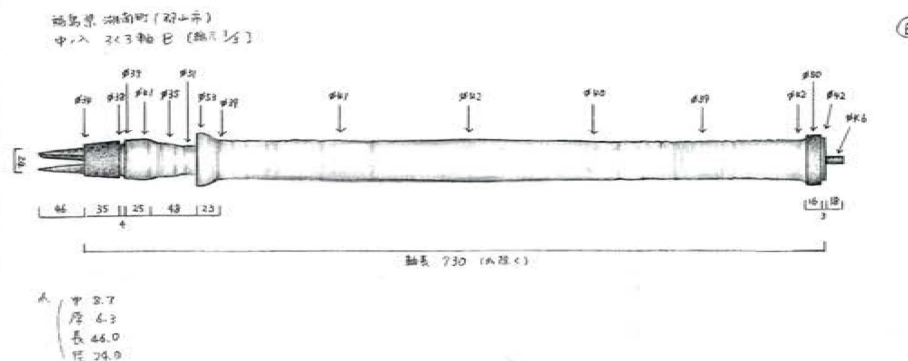
〔形式・概要〕 軸のみの資料。細身で長い軸、わずかに中太で前部軸受の内側にツバがある会津特有の形。台や支柱など本体部分は欠損。

〔軸〕 細身の木軸、前部軸受手前にツバあり。後部の鉄芯は欠損し、木軸も割れて一部欠けるが割れた部分に鉄芯の装着された跡があり、それによれば鉄芯は約65mmほどの深さに差し込まれていたと思われる。また軸端に段差があることから、金輪がはめ込まれていたものと思われる。

〔爪・軸頭〕 3本円環型の爪、爪の開き幅が16mmと狭く長さが短い(30mm)のも会津の特徴である。軸頭には金輪があったと思われるが欠損。



資料所在地(施設)	福島県郡山市湖南町中ノ入 (小椋秀男 個人蔵)		
調査台帳番号	No.55	中ノ入	資料番号 ろくろ軸 B
文化財指定等			



基本データ＝ 軸長730mm 軸径39～53mm

#### <観察記録>

〔形式・概要〕 軸のみの資料。細身で長い軸、わずかに中太で前部軸受の内側にツバがある会津に特有の形。台や支柱など本体部分が失われている。

〔軸〕 細身の木軸、前部軸受手前にツバあり。軸の両端に金輪あり。特に前の金輪は幅が広い筒形で、これも会津独特の様式。保存状態がよく、軸の木質も明るい褐色の光沢があり平滑な木肌である。材質はアズサという。前部の180mmほどと後部の190mmほどの部分に波状の筋がある。ろくろ目がすり減った状態か？なめらかな凹凸である。軸受部は段が2段になっていて、ろくろ目がはっきり残る。

〔爪・軸頭〕 3本円環型の爪、爪の開き幅が24mmと狭く、長さが46mm。

〔地方名〕 ろくろ軸

〔採集地〕 福島県郡山市湖南町中ノ入

〔製作地〕 〔使用地〕

〔来歴〕 中ノ入集落の祖先は天正18年(1590)に蒲生氏郷の会津転封に伴い移住してきた近江の木地挽きと伝える。会津城下から耶麻郡黒岩村、南山御蔵入琵琶村を経て天明6年(1786)に安積郡三代村中ノ入に至る。中ノ入では明治の中頃まで木地挽きを業としていたが、その後衰退し大正末期に廃業。資料として残る手引ろくろの軸はそのころまで使っていたものという。大正14年当時の集落戸数は13戸、唐風作りの立派な玄関を備えた屋敷であったという。(「岩代木地山」2015小椋秀男 による。)

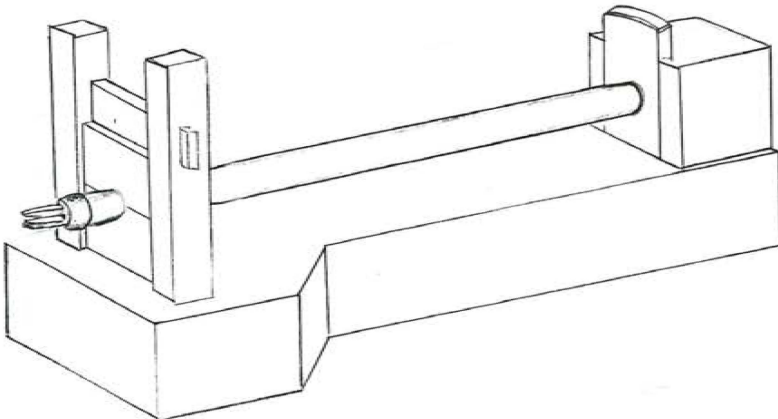
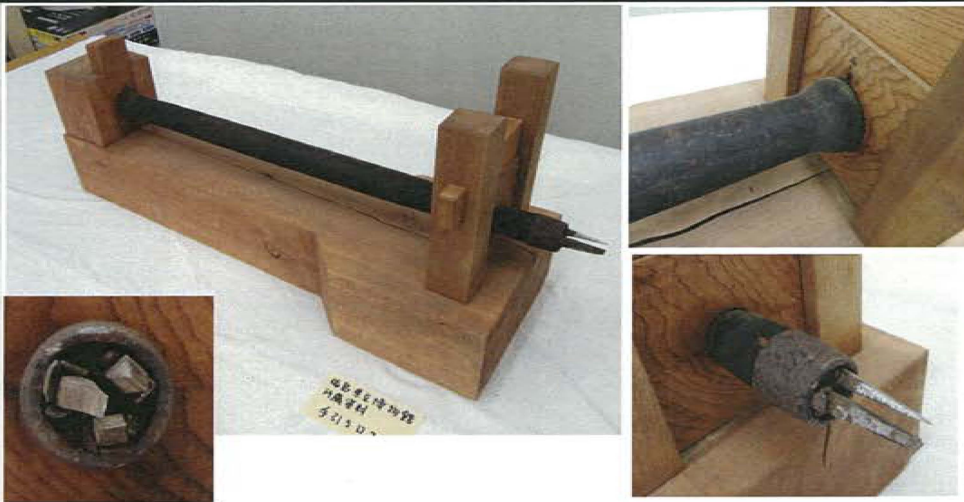
〔保存状態〕 きわめて良好な保存状態。アズサという堅い木のためか破損がなく、全体が明るい褐色でなめらかな光沢がある。金輪、爪も黒錆で安定している。









資料所在地(施設)		福島県会津若松市 福島県立博物館		
調査台帳No.	21	原資料No.		
文化財指定等				
				
<p>〔資料来歴〕</p> <p>現地名 ジキボウ 採集地 福島県大沼郡昭和村見沢(みさわ) 所有者 小椋 (昭和村から会津若松市門田に出て木地職を続けていた) 採集年 昭和50年代</p> <p>〔保存状態〕</p> <p>木製軸は保存状態良好だが、表面の状態からしてかなり古いものと思われる。 軸以外の台、支柱等は復元のために新しく作られたもの。 (喜多方の木地師による)</p>				
<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・軸受はヨコ受型。二本の支柱間に横木を二枚落とし込み、その間に軸を挟む。</li><li>・軸受部の軸は段のないシンプルな段欠き型と思われる。(推定)</li><li>・軸受部手前の軸形状に特徴があり、軸受に向かって一旦絞り込まれた軸がツバ型に広がって径が太くなっている。</li><li>・軸の後端部はわずかに細く絞りこまれ、軸受との間に3mmほどの隙間がある。この隙間にワッシャ様の物が窺われるが確認できない。</li><li>・爪は3本、配列は円環型である。</li><li>・3本の爪の間隔は極めて狭く、直径15mmほどの円におさまるほど。 (爪は加工の様子からみて最近になって付け替えられたものと思われる。)</li><li>・鉄輪は分厚く、幅もあり大変がっしりとした造り。</li></ul>				



と言っても過言ではない。従って由来のはっきりしない資料もあるが、グループ内のいくつかの資料の来歴が判明していることから、これらがほとんど同系統に属すると判断しても差し支えないのではないか。つまり蒲生氏郷招致の江洲木地屋が持ち伝えた道具の特徴が、細身の軸に3本円環型の爪、ツバ付の軸を持つろくろだったのではないだろうか。ただ、いくつかの疑問はある。

滋賀県でこの種のろくろが確認されていない点、なぜ同じタイプのろくろが江洲近辺に伝わらなかったのか、ろくろ本体がどのような形をしていたか不明等々である。確かに近江の神社に最も近く、歴史の古い木地屋集落、朽木のろくろはまったく異なるタイプであった。

また、これだけの軸が残っていながらなぜ本体がないのか、これも解決できない課題である。木地屋は移動するときにろくろの軸のみを持って、台その他は移住先で作成したということに原因を求める見方もあるが、そうであれば最後の定住地に移った時には台を作らず一度も木地を挽かずに即帰農したということを、すべてのケースについて想定しなければならない。果たしてそういうことがありうるだろうか。

また、ろくろの構造について言えば、支柱の構造でタテ受型とヨコ受型に二大別されることを指摘してきたが、会津型の軸はこのどちらに属するのか。推測ではあるが、いくつかの復元事例や辛うじて残った記録写真等から判断してヨコ受型である可能性が高い<sup>(48)</sup>。いずれにしても会津の木地屋をめぐる課題はなお多いと言わねばならない。

## 第5節 東北のろくろ（まとめ）

ここまで東北地方のろくろについて、それぞれの地域の木地漆器業の歴史的背景に関連付けながら分析検討してきた。今一度振り返れば岩手県で4点、秋田県で4点、宮城県で1点、福島県で9点、合計18点の東北地方の資料を話題にして来た。また青森県と山形県では現段階で資料の把握ができなかった。これらを踏まえて東北地方全体としてろくろの系統、技術の系譜、更に木地屋の動きを包括的に捉えてみたい。

### （1）ろくろの構造から

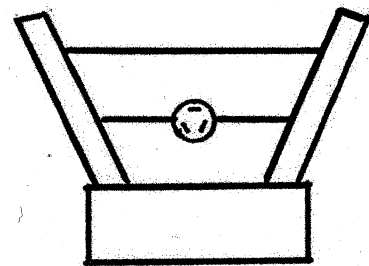
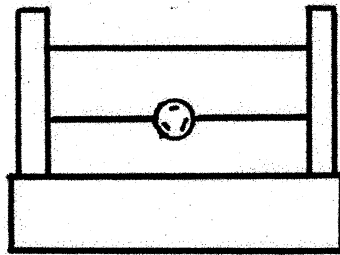
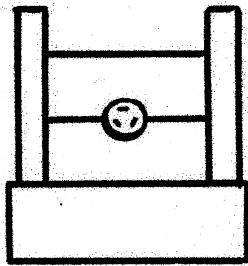
東北地方の木地屋について、「同じ東北と言っても木地屋のありようが会津と会津以北ではかなり異なったニュアンスがある」と言ったのは橋本鉄男である。彼は移住のスタイルについて言っているのだが、同じことが技術についても言えるだろうか。ろくろに即して検討した結果では、形態において様々な変化が見られるものの、基本的な構造という点では東北はおよそ一つのタイプに属するように思われる。その基本的な要素は、ヨコ受型の支柱と3本円環型の爪である。ありふれた構造のタイプにすぎないように思われるかもしれないが、この2つの要素は調査済みの手引ろくろ全資料の中で、数においては極めて少なく、分布においてはほとんど東北に集中しているのである。（第IV部[分布図1]、[分布図2]を参照）

今仮に、支柱構造がヨコ受型で爪の数と配置が3本円環型のろくろを「会津基本型」とすれば、この基本構造をそのままに、支柱間の幅を広げたものを「宮城型」、さらに支柱間の



基部の幅を変えずに上部の幅を広げたもの（結果として支柱はV字に開く）を「秋田・岩手型」と名付けてみよう。そうすると次の図のような一連の変形過程が見えてくる。それでは、この基本構造を変形させた動機は何だったのか。そこには①切削技法の変化と②ろくろの使用形態の変化（木地職の業態変化）があったことがわかる。

1 会津基本形      ⇒      2 宮城変形 (1)      ⇒      3 秋田・岩手変形 (2)



・変形の意図

支柱上部の横棧に  
棒を差し掛けたい。

持ち運びを容易にする  
ために軽量化したい。

・構造的対策

支柱の幅を広げて横棧  
を伸ばす。台も広げる。

上部横棧の幅を確保して  
台の幅を狭める（軽量化）

こうしてみれば、すべて構造的には同一の基本形がベースになっていることがわかる。そして会津から宮城へ伝わった時にまず技法的な変化があったことが想定される。つまり支柱上部の横棧に「渡し棒」を差しかける発想が生まれたという事である。この技法は秋田、岩手にも受け継がれていく。だからこそ秋田・岩手ではこの技法を捨てずにろくろ本体の軽量化という難題に直面し、その結果V字構造を考案したと考えられるからである。この場合、秋田と岩手のどちらが先か、どちらから伝わったのかということは一つの問題であるが、挽物製作の業態がどちらもろくろを持ち運んで注文先で仕事をしており、軽量化への工夫はどちらも必要であったわけで、にわかには後先を決めがたい。むしろ、通例はウマとかウシと言われる鉋支持台を、「渡し棒」或いは「腕木」といわれる棒に変え、さらに支柱上部の横棧に差し掛ける方法に至った、その動機が何であったのか、そこがポイントだろう。しかし現在それは不明と言わざるを得ない。

次に爪数と配列について3本円環型を基本として、東北はすべて同じ類型に入るとしたが、実は岩手県浄法寺のところで述べたようにそこでは3本ではなく4本であった。しかし本州中部以西で一般的にみられる4本爪はすべて平行型で爪の向きが同じであるのに対して、岩手県の4本爪は独特の配列であった。いわば3本円環型の中央にもう一本加えたというような形（4本変形型）である。

【爪の配列図】

4本平行型



会津型  
(3本円環型)

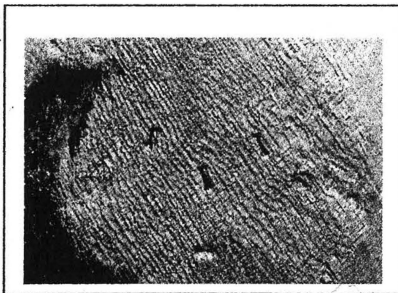


浄法寺型  
(4本変形型)



つまり3本円環型の中央に、3本の内のどれかと平行になるようにもう一本を加えれば浄法寺型になる。爪の配列においても会津型(3本円環型)を基本形としたバリエーションであった。この浄法寺型はいつ、どこで、どのような背景で生まれたのか。それについて興味深い事実があった。

宮城県蔵王町で平成19・20年度に同町大字小村崎にある十郎田遺跡を発掘したところ大量の木地製品が出土した。遺跡は井戸跡とみられ、その堆積土4層から挽物未成品(荒型)180点が出たのである。その内訳は小皿158点、椀21点、皿1点で、いずれからもろくろ挽きの鉋痕は確認されていないが、かなり入念に切削して器の形状に仕上げた割り物であった。注目されるのは椀21点の中に、底面にろくろの爪痕を持つものが1点あったことだ。このことから発見された未成品はろくろ成形することを意図して製作された荒型で、ろくろ加工されないまま遺棄されたものと考えられる。そして爪痕が確認された1点もろくろ挽の痕がないことから、鉋を当てる前にろくろから外されたことが想定される。その爪痕が浄法寺型とまったく同じ4本爪だった。つまり3本円環型の中央にもう1本打ち込まれた爪痕であった。このことは会津の基本型が北に伝わる過程で何らかの技術的な変革が行われた可能性を示唆している。それが北上して岩手県浄法寺に伝わったものが、現在の資料に形を残している変形4本爪ではないだろうか。なお、十郎田遺跡から出土した木製遺物の製作年代は用材の放射性炭素年代測定の結果から13世紀中頃とされている。(蔵王町教育委員会「文化財調査報告書第14集」)



↑十郎田遺跡出土のアラガタ底面の爪痕

勿論このことで、浄法寺型(4本変形型)の起源が宮城県蔵王町でその時期が13世紀半だ、ということと言えるわけではない。蔵王町も技術の通過点であっただけかもしれない。ただ、技術の流れとして3本円環型がベースにあって、そこに何らかの意図で一本追加して4本変形型が生まれたということは想定できるのではないだろうか。<sup>(49)</sup>つまり支柱の変形過程と同様に爪の型においても先行する基本型は会津にあって、北に伝わる過程で変化したということである。もしそうだとすれば、会津における挽物技術は13世紀半以前に存在したということになる。蒲生氏郷が近江から木地屋を招致する遙か以前であり、平泉の文化の時代にまで遡る。そして、その技術を持っていた主体がいわゆる地木地といわれる木地屋

たちであったのかもしれない。そうなれば「(3) 会津地方のろくろ、その技術の系譜」で、ほとんど孤立した技術と評した会津型ろくろ技術を蒲生氏郷由来の江洲木地師に結び付けたのは早計であった。<sup>(50)</sup> 近江にも痕跡をとどめない孤立した技術は、会津を含む奥州の地木地に結び付けた方が事実に近いのかもしれない。その技術の孤立性の問題は全国の傾向を見ながら別に論ずることとしたい。

## (2) 東北における氏子狩の歴史

近江の国の2つの寺社による木地屋の全国支配、すなわち氏子狩は会津への頻繁な訪問に対して、会津以北では激減することを前段で述べた。ここで東北と近江の関係を考える前にもう一度氏子駈帳のデータによってその様子を確認しておこう。下の表は蛭谷の氏子駈帳による東北4県の氏子狩のデータをまとめたもので、これが東北におけるすべての廻国の記録である。

氏子駈帳番号	年 号	西 暦	福島県	山形県	宮城県	秋田県	備考
1 2 号	寛保 3 年	1743	3 (60)	—	—	—	
1 3 号	延享 3 年 寛延 2 年	1746 1749	36 (332)	5 (10)	2 (32)	—	
2 0 号	文政 10 年	1827	6 (60)	4 (18)	7 (33)	3 (12)	
2 1 号	嘉永 2 年	1849	50 (301)	3 (8)	—	—	
2 4 号	安政 4 年	1857	37 (171)	4 (10)	—	—	
3 1 号	明治 26 年	1893	32 (135)	—	—	—	
合計(延数)			164 (1,059)	16 (46)	9 (65)	3 (12)	

\* 県別の欄の数値は

木地小屋数 (合計世帯数)

\* 木地小屋＝木地屋が移住先の山中で仮住まいした小グループの集落 2～数世帯が通例。

蛭谷の氏子狩の開始が正保4年(1647)であるから、約100年経過して初めて東北へ廻って来たことになる。まず表を見てわかることは、福島県への廻国の圧倒的な数と、それ以北の県との極端な差である。前に述べたが青森、岩手へは一度も行っていない。廻国の数の多さは、いかに多くの木地屋が会津の山に入り込んでいたかということである。おそらく会津においては廻国数と木地屋数に大きな乖離はないだろう。むしろ問題は会津以北における氏子狩の動きと実際に漂移していた木地屋との関係だろう。表を見て推測がつくのは福島から山形、宮城、秋田と北に行くほど廻国の数が激減し、移動する木地屋がいないわけではないのに追跡する意欲を失ったかのような印象を受けるのである。木地屋の数とすればもちろん福島と比べるべくもないだろうが、それでも会津を抜けて北へ向かった木地屋は相当数いたと思われる。しかし近江の支配勢力はそれ以上追わなかったのである。あたかも



会津でこれだけ廻ればもう十分というかのように。こうして北へ漂移した木地屋の足跡は各家個別の文書に記されていないならば追跡は難しく全体の把握は更に容易ではない。

そうした木地屋で足跡がわかっている例としては「(4) 川連のろくろの特徴と木地業」で紹介した小椋政右衛門がいる。蛭谷 20 号簿冊に鳴子町鳴子で氏子狩を受けた政右衛門は、これを最後に氏子駄帳から姿を消し羽後木地山から更に北上して北秋田郡小阿仁村、南秋田郡五城目町へ移動したことがわかっている<sup>(51)</sup>。まさに信州から遥かな旅路であったに違いない。会津以北の東北では、どのような木地屋がどんな活動をしていたのだろうか。

### (3) 木地屋の業態と移住

「鳴子とその周辺の木地業」で沢口滋は興味深い報告をしている<sup>(52)</sup>。鳴子の周辺には筒井系の木地屋と「足軽が内職に木地を挽いた」木地屋の二系統がいて、後者は惟喬信仰を全く知らずにいたこと、お互いに疎外感があったのではないかと、等々の主旨である。その筒井系の木地屋として中山平、鬼首、門沢、赤倉を挙げているが、これらはいずれも蛭谷の氏子駄帳に名前が出てくる木地屋であるから、筒井系(蛭谷系)木地屋であることは間違いない。また足軽が内職でやっていた木地屋として宮崎町の田代を挙げているが、これがいわゆる地木地の一類型ではないだろうか。遠刈田新地の木地屋と同じである。

こうして渡木地と地木地が東北各地に混在して、互いに反発し合ったり影響し合って重層的で輻輳した東北の木地業の歴史を作っていたものと思われる。その中でやはり問題にしなければならないのは、地木地と言われる木地屋の業態である。一般的には木地屋といえは良材を求めて深山を渡り歩く職人ととらえられることが多く、『新編会津風土記』で描かれた木地屋のイメージもまさにそうしたものであった。さらにそうした木地屋の移住を「<sup>とび</sup>飛」と言うとも。確かに会津の木地屋はよく「飛」んだことがその足跡から窺うことができる。明治に入ってから移住を繰り返していた一家もいた。では地木地はどうだったか、居木地と言う言葉もあるように彼らは定住していたのである。既に見て来た浄法寺の木地屋も恐らく一度も移住生活を経験したことのない木地屋であったと思う。同じ東北でありながら会津の木地屋と会津以北の木地屋では移住に関してまったく異なる様相を示している、この事に橋本が注目し、指摘していたことは既に述べた。では、なぜ同じ木地挽を業としながらこの違いが生まれたのか。いくつか考えられると思うが、一番に挙げなければならないのは使用樹種の問題ではないだろうか。木地屋にとって最も重要な樹はトチであった。材が均質で歪みの来ない、美しい木肌をもつトチは加工し易さにおいても、製品の質としても最適だったのだろう<sup>(53)</sup>。しかしトチは林を形成せずに山の中に散在する樹種である。良材尽きれば住まいを移す木地屋の生活スタイルの最大要因は使用樹種にトチを選んだことになったのではないかと。では、ブナはどうか。「木地屋の世界—その移動と森林の変化」<sup>(54)</sup>で中川は木地屋によるブナとトチの利用について論じているが、ブナとトチの利用の仕方の違いについてはあまり重きを置いていないように思われる。ただ木地屋集落の分布とブナの分布を重ねるといふ試みは大変興味深い。近畿以西のブナの分布域と木地屋集落の分布

域がほぼ一致するという事、それに対して東北においてはブナの分布域が木地屋集落に比べて相当に広い、という指摘は示唆的である<sup>(55)</sup>。浄法寺歴史民俗資料館へ調査に行ったとき、椀木地の樹種について尋ねたらほとんどがブナであるとの答えだった。そうであれば東北の木地屋にとっては「良材が尽きる」ことはなかったはずである。そして新潟県糸魚川の木地屋はブナ林のただなかに住みながらトチだけを伐り尽して移住を繰り返していたのだ。つまりブナの分布域と木地屋の分布域が重なっていても、必ずしもブナを利用しない木地屋がいたということである。恐らくブナの分布域の中にトチの分布が包摂されていたということではないだろうか。

移住に関して二番目の要因は、作業工程の違いではないだろうか。浄法寺にしても川連にしてもその木地屋が原木を手に入れる方法は川流しであった。山で伐採した大量の原木を安比川や皆瀬川に投入して川下の町まで流して、それを引き上げて木地の材料にしていた。そこで使われる技術は玉切り、ブン切りであった<sup>(56)</sup>。この様子をよく伝えているのが先に触れた『椀師作業工程絵図』である(p68 右図参照)。一方の移住型の木地屋はトチを求めて山奥に入り、良木に出合えば伐採してそこでムキドリという方法でカタオコシをし、アラガタを作って村まで運ぶという方法であった。つまり原木を村まで運んで加工するか、原木を山に求めてそこで作業するかの違いであるが、この違いが移住か定住かを決めたわけだからその差は大きい。そしてこの違いは、材料としてブナを使うかトチを使うか、その選択の段階で既に方向づけられていたといっても過言ではないと思うのである。

このほかにも製品の多様化(=使用樹種の多様化)の問題、温泉立地の問題、東北独特の木地玩具の問題等が密接に関係して、移住しない木地屋の歴史が刻まれてきたものと思う。ただ、その中であって南から北上し、移住生活を基本にしてきた木地屋がどのように変容したのか、また変わらなかったのか興味ある問題である。信州木地屋政右衛門の軌跡が一つの事例であろうか。

## 第1章-第1節~第5節〔注〕

- (1) 国指定重要民俗文化財：浄法寺の漆掻きと浄法寺塗の用具及び製品

指定年月日：1987.03.03(昭和 62.03.03)

- (2) 岩手から秋田、そして宮城の資料を調査して、東北では後部軸受を木芯で作ることがある時期、広く行われていたらしいということがわかった。

- (3) 岩手県 1961『岩手県史第三卷中世編下』 p988 三 古式箔椀

- (4) 佐藤源八 1970『南部二戸郡浅澤郷土史料』(アチックミュージアム叢報 第37) p293~294

- (5) 田中庄一 1962『近世二戸漆の研究 木地椀』p1 二戸文化史研究会

- (6) 同上 p8~9

- (7) 岩手県教育委員会 1978『漆掻き塗師の生活習俗』p8 岩手県教育委員会 盛岡

- (8) 田中庄一 1962『近世二戸漆の研究 木地椀』p16 二戸文化史研究会

- (9) 同上 p14~15 二戸文化史研究会

- (10) 橋本鉄男 1979『ろくろ』p102～103 法政大学出版局 ものと人間の文化史 31  
『浄法寺町史（上巻）』p535 では（4）を引用しながら、赤坂田一体に「畑」地名が他にも存在することを述べている。
- (11) 左衛門四郎家は文化2年或いは文化3年に藩から御用木地師の業績により「関」という姓を名乗ることを許されている。（『浄法寺町史（上巻）』p543）  
関家に伝わる「木地師元祖略御縁起」は高松御所金龍時から関左衛門四郎宛てに出された文書で、各町史をはじめ郷土史文献に紹介されている。しかし、発行元の君ヶ畑の氏子狩は会津以北への訪問がなく、さらに宛先が関家と記されていることから文化2～3年（1806）以降ということであり、君ヶ畑側の動きに照らしてこの文書が関家にあること自体が不自然となる。どこかで複製され流布したものではないだろうか。
- (12) 岩手県教育委員会 1978『漆掻き漆塗師の生活習俗 — 岩手県二戸郡浄法寺町』文化財調査報告第27集 p41「附 畑の木地屋」
- (13) 橘 文策 1963『木地屋のふるさと』p116 未来社  
佐藤友晴はこの部分を「<sup>しげみ</sup>支挟」という難しい言葉で呼んでいる。どの範囲で使われていた言葉だろうか。（佐藤友晴 1961『蔵王東麓の木地業とこけし』p189 未来社）
- (14) ろくろ作業をしているのは藤村金作氏。
- (15) 本資料とまったく同じ形態の手引ろくろが橋本鉄男 1979『ろくろ』（法政大学出版局）に掲載されている（p348）。その注記によれば著者が稲川町久保の伊藤雅義より受贈されたものであることがわかる。本文（p350）にも久保の某家に所蔵されていたものを同地の伊藤雅義の尽力で著者の所有になった旨を記している。著者による実測図作成が昭和39年（1964）とあるので、恐らくそのころの入手であろう。  
ところで歴博の展示資料を調査し、その実測図を作成したところ橋本が作成した実測図のデータと完全に一致した。このことから、橋本が晩年自らの所蔵品を整理し、歴博に寄贈したものと推測されるが、経過はともかく資料は同一と断定できる。
- (16) 分解できない場合のこの部分の調査では、字消板（製図用のスチールの薄板）に目盛りを付けて隙間に差し込んで鉄芯の径を算出するが、この時の計測ではほとんど軸本体と変わらない太さであることがわかった。
- (17) 岡山県立博物館蔵 ろくろ（田羽根-4）（調査番号37）この資料は台の長さが137cmと調査資料中で最長だが、台の胴の部分から後部軸受にかけてかなり細身に絞られており（トンボ型）重量は23kgであった。これに対して川連の工芸館展示資料（調査番号33）は、台長130cm、厚み17cmの長方形型であることから、重量はこれをかなり超えるものと推測できる。
- (18) 橋本鉄男 1972「東北地方の木地屋の移住史覚書」『こけしのふるさと』p42 未来社
- (19) 同上 p109
- (20) 江田絹子 1972「羽後に形成された木地山と川連の木地業」『こけしのふるさと』p273



- (21) 同上 p274
- (22) 同上 p278～279
- (23) 江田絹子『椀師作業工程絵図』(1966.4)は、その存在することしかわかっていなかった実物を伊藤雅義が橋本鉄男の要請に応じて探し出し、江田絹子の手によって限定500部の私家版として複製が作られた。(複製版 p36 にその辺の事情が伊藤雅義によって興味深く綴られている。)
- (24) 江田絹子 1972「羽後に形成された木地山と川連の木地業」『こけしのふるさと』p268  
近江系統の木地屋を江田は「小椋系木地屋」と呼んでいるが、これも木地の文化において東北という地域の置かれた独特の立場を自ずと示して興味深い。つまり東北には近江の国の木地屋文化と接点を持たずに渡世した地木地が多く存在し、当然彼らは小椋姓を名乗らずに、例えば佐藤とか高橋といった姓の木地屋たちだった。
- (25) 同上 p269
- (26) 伊藤雅義(湯沢市雄勝図書館からの情報を要約)  
明治42年(1909)生まれ。昭和45年(1970)没。川連漆器の塗師をしながら川連漆器、木地業の歴史を調査研究。木地屋研究の杉本寿、橋本鉄男、こけし研究の江田絹子と交流があり、研究の成果を書物にすることを勧められて『川連の木地業と羽後の木地山』(江田絹子と共著)を著す。稲川町史資料編の編纂執筆にも従事。『椀師作業工程絵図』(江田絹子著)の解説を担当。
- (27) 金井 晃 福島県南会津郡下郷町在住  
自宅工房で木地を挽く傍ら木地屋の歴史研究のために日本各地の木地関連古文書を調査している。『木地語りー会津田島のとびの足跡ー』2001(田島町教育委員会)の主要部分の執筆を担当。ネパール等東南アジア方面の調査にも取り組んでいる。
- (28) 蛭谷氏子駈帳の第20号簿冊、文政10年に政右エ門、信右エ門兄弟は鳴子で氏子狩を受けている。信州から旅をともした父要助は既にないない。
- (29) 橋本鉄男 1972「東北地方の木地屋の移住史覚書」『こけしのふるさと』p76～90 未来社
- (30) 江田絹子 1972「羽後に形成された木地山と川連の木地業」『こけしのふるさと』p255
- (31) 雑誌「季刊銀花 No.22 昭和50年6月30日」に本資料の写真が掲載されていることを金井晃氏から情報を受けたのが、本資料の存在を知った最初であった。同誌の記事から資料の所在を確認するに当たってはこけし愛好家の小椋秀男氏のお世話になった。
- (32) 橘 文作 1963『木地屋のふるさと』p116 未来社  
「(写真は)昭和の初め頃、宮城県刈田郡遠刈田新地の木地屋佐藤直助老から報告された轆轤で、同地に足踏轆轤が移入された明治18年までは、部落全戸で使用していた形態である。」
- (33) 佐藤友晴 1961『蔵王東麓の木地業とこけし』未来社  
佐藤は遠刈田新地の古くからの木地屋の家系に生まれ、こけし工人として仕事をす

る傍ら村の歴史や木地業について調べ、それを原稿にまとめたが太平洋戦争から帰還して間もない昭和 21 年に 31 歳の若さで世を去った不遇な職人であった。その遺稿は 10 年後にこけし愛好家によって自費出版され、その後菅野新一によって表題のタイトルで再版されたのが昭和 36 年(1961)であった。著者の執筆の時期は昭和 15 年前後とされている。二人挽きろくろ(手引ろくろ)の説明は p187~190

- (34) 橋本鉄男 1972「東北地方の木地屋の移住史覚え書」『こけしのふるさと』所収  
P97~103 Ⅲ移住史上の問題点 1 帳外の木地屋 (1) 遠刈田新地
- (35) 佐藤友晴 1961『蔵王東麓の木地業とこけし』p100、101 未来社
- (36) 橋本鉄男 1972「東北地方の木地屋の移住史覚え書」p42Ⅱ 東北地方の飛のあとさき  
『こけしのふるさと』所収 未来社
- 杉本寿 1974『木地師制度の研究第 1 巻』第 1 節会津の木地師制度 p3
- (37) 会津藩地誌局編 1894『新編会津風土記 六』巻 4 8~巻 5 3 萬翠堂 若松市  
『新編会津風土記』は会津藩によって江戸末の享和 3 年(1803)から文化 6 年(1809)にかけて編纂された会津領内の地誌全 1 2 0 巻。完成後幕府に上進され、江戸時代における日本の地誌の代表とされる。活字本は数種あるが、本論は最も古い明治 27 年(1894) 萬翠堂版によった。
- (38) 蒲生氏郷の会津入部に伴ってどれだけの木地屋が招致されたかについては、『会津新編風土記』の人数とは異なる数の文献もあり、定かではない。すべてが一度に移住したわけではなく、城主入部後に波状的に入った人々もいたのかもしれない。
- (39) 保科正之(1611~1672) 徳川秀忠の 4 男、信濃の高遠城主保科正光の養子となる。  
1843 年会津藩主となり、藩政の確立に尽力し初期の名君の一人とされる。  
(岩波日本史辞典「保科正之」を要約)
- (40) 田島町教育委員会 2001『木地語りー会津田島のとびの足跡ー』p48~51
- (41) 同上 p98 「帳外の木地師」
- (42) 神田賢一 1991『木地師三代』歴史春秋出版 会津若松
- (43) 田島町教育委員会 1980『奥会津地方の山村生産用具〔1〕』p76
- (44) 田島町教育委員会 2001『木地語りー会津田島のとびの足跡ー』p63 二 木地の全盛
- (45) 只見町史編さん委員会 1993『只見町史 第 3 巻 民俗編』p272
- (46) 会津藩地誌局編 1894『新編会津風土記 六』巻五十一 耶麻郡之三 川東下二十箇村のうち 小田村端村 木地小屋達澤
- (47) 橋本鉄男 1972「東北地方の木地屋の移住史覚え書」p54~55 『こけしのふるさと』所収 未来社
- (48) 復元事例がすべてヨコ受型であることについて、復元資料の製作者にその根拠を確認することも必要と思うがまだ行っていない。事例としては、
- ・奥会津博物館 (No.18) 博物館展示資料
  - ・福島県立博物館 (No.21) 博物館収蔵資料

- ・達沢個人蔵 (No.38) 地区でイベント用に台等を復元製作
- ・中ノ入個人蔵 (No.55) 福島市西田記念館における企画展用に復元製作

以上はすべてヨコ受型で復元されている。ろくろと言えはヨコ受型をイメージすることが会津の人たちには当たり前のことになっているのではないかとさえ思ってしまう。図像資料では貴重な写真が『湯本山郷史』という文献に掲載されており、天栄村更目木集落で使われていた古い手引ろくろが確認できる。それがやはりヨコ受型であった。是非原資料を確認したいと思ったが、残念なことに火災で焼失したとのこと。結果として未だに会津では完全な形のろくろには出合っていない。(以上同書のコピー及び関連情報は金井晃氏による)

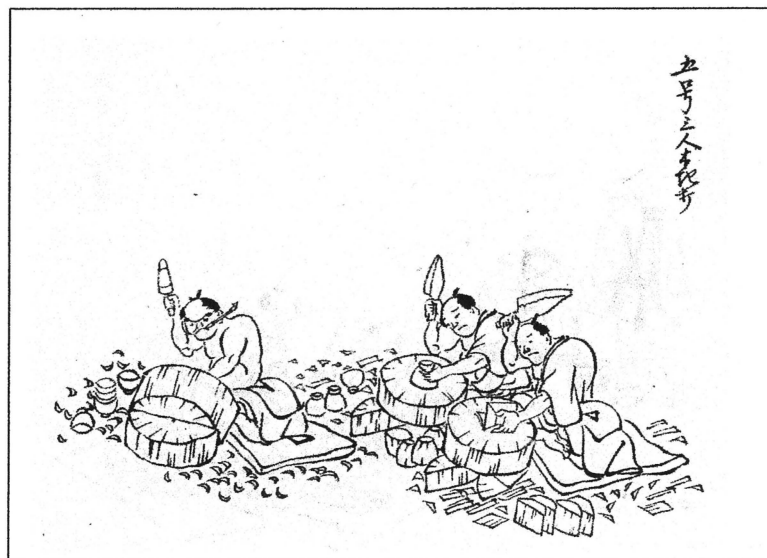
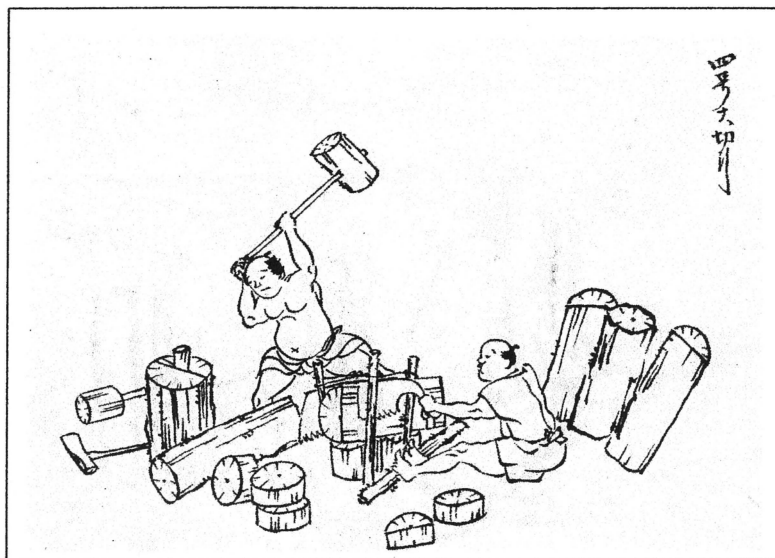
\* 星 勝晴 1973『湯本山郷史』上巻 p90 本書には上述の写真のほか同資料の明解なスケッチが掲載されており、寸法表示もある。軸は径55mmでツバあり、爪は3本円環型。興味深いのは正面右側の支柱基部に「鉋取台」と記された部材が取り付けられていること、さらにその側面に何かを保護するように板材が取り付けられていることである。こうした構造は他に例がない。返す返すも焼失が悔やまれる。

- (49) 爪の数と配列については多くのバリエーションがあり、それぞれの意図については不明なものも多い。浄法寺変形4本爪の場合考えられることは材料固着の強度の問題ではなく、作業途中で荒型が脱落した場合に、確実に材料を元の爪痕に嵌め戻すことが出来る、ということ考えたのではないだろうか。もちろんこれは当初のセンターをずらすことなく材料を嵌め戻すという趣旨である。3本円環型では120度回転させて当初と異なる位置に取り付けることが起こるからである。
- (50) 会津独特のろくろ軸を持ち伝えた木地屋の末裔が、先祖は江洲木地師だと伝えていることと、噛み合わない点はどう解釈するか。会津の木地屋研究家金井 晃氏は「会津の木地屋はみんな自分の先祖は江洲木地師だ、と言う。」と話していたが、それが参考になるかもしれない。
- (51) 金井 晃氏の教示による。
- (52) 沢口 滋 1972「鳴子とその周辺の木地業」p223・224『こけしのふるさと』所収
- (53) 新潟県糸魚川市大所木地屋では、古老から聞いた話として木地屋はとにかく何よりもまずトチを求めて山に入り、それで挽木地を挽いてきた、と。ブナは使わなかったのか、と言う問いに、その古老は大所に定住してからは時にはブナも使ったことがあるが、やっぱりトチが一番だ、と語っていた。集落から少し奥に入れば白馬山麓の広大なブナ林が広がっていたにもかかわらず、その中に点在するトチが木地屋の樹だったのだ。
- (54) 中川重年 1985「木地屋の世界—その移動と森林の変化」『ブナ帯文化』所収思索社
- (55) 同上 p178~179 木地屋の移動経路とブナ林の分布
- (56) ろくろで挽く前に、器の大まかな形を手斧などで成形したものをアラガタという。原木(丸太)からアラガタを作るのに二通りの方法があり、一つは「ブンギリ」、もう



一つを「ムキドリ」という。まったく異なる方法で技術的な交流がないことから木地屋の系統を探る上でも重要な手掛かりになる。ブンギリは丸太を適当な長さに切つて（タマギル）、次にそれを木口からミカン割りに分割して、その一つ一つを器の形に成形していく。（下図参照）一方「ムキドリは」倒した原木にヨキ（手斧）一丁で独特の切込みを入れ、直接原木から器の原形となる木塊を次々とはがし取っていく（カタオコシという）方法である。

（椀師作業工程絵図のうち「4号大切り」と「5号三人木地打ち」がブンギリの様子を描いている。）



## 第2章 北陸地方のろくろとその歴史的背景

北陸地方のろくろとしては、石川県で2点、新潟県で10点を確認している。それ以外の県では資料が確認できなかった。ただ、木地屋の歴史としては福井県に古くからその活動の跡が見られ、富山県では現在も挽物の伝統が生きている。後段で石川県のろくろを検討する中で触れることになるが、近世以降の氏子狩の歴史では加賀、能登、越中ではなぜか空白域になっているのである。いずれにしても民具資料を手掛かりとする研究であることから、資料のあるところを中心に話を進めていきたい。

### 第1節 新潟県のろくろ

#### (1) 糸魚川市大所木地屋のろくろ

糸魚川市大字大所木地屋は、<sup>(1)</sup> 定着して単独の集落をつくった木地屋としては県内唯一の歴史を持つ集落である。<sup>(2)</sup> その歴史については第1章で詳しく述べたのでここでは資料を中心に検討する。同集落では出身者が中心となって集落内に残る民俗資料の収集整理を行い約1500点の資料を確認、平成19年に国の重要有形民俗文化財の指定を受けている。それらの資料の中からろくろ5点、軸のみ3点、また国指定以前に他地域の文化施設に所蔵されていたろくろ2点を加えて以下に概要を述べる。

各資料の基本データ一覧

台帳 番号	資 料 No.	形式	全長	軸長	軸径	重量	軸受 (中ツバ)	爪芯	木口 作業痕	T字 対称性
1	糸 939	タテ受型	940	755	54	11.3		○	○	非対称
2	糸 1026	タテ受型	813	630	49	6.6	○			非対称
3	糸 1947	タテ受型	865	703	55	10.7		○		非対称
4	糸 1948	タテ受型	980	720	55	10.8	○	○		対称
5	上越 890	タテ受型	925	707	75			○		非対称
6	金沢 139	タテ受型	925	701	52				○	非対称
7	糸 1015	タテ受型	903	740	53	10.6	○			対称
8	糸 1018	軸のみ	—	671	52			○		
9	糸 1025	軸のみ	—	692	53			○		
10	糸 1028	軸のみ	—	771	58			○		

糸=木地屋民俗資料館 上=上越市博物館 金=金沢市教育委員会

資料の数が多いので、まず全体的な傾向や共通する特徴について概要を述べ、その後に個々の特徴について論ずることにしたい。

まず言えることは基本構造はすべてタテ受型で、直通（ストレートの円柱）の軸であることだ。また、爪は4本平行型で、爪の付け根に木芯が突起状に残っているものが7例ある。

軸受の構造はシンプルな段欠き型が7例、中ツバ型が3例ある（台帳番号2，4，7）。後部軸受の穴の内壁に黄銅片を張ってメタルとしているもの3例（台帳番号1，3，5）。台前部のT字が左右非対称のものがほとんどだが、対称のものが2例あった（台帳番号4，7）。この他特殊なものとして、台の前方木口に四角い作業痕のような削り跡が確認できたものが2例あり（調査台帳番号1，6）、この作業痕を持つ資料は岡山県、岐阜県の資料でも確認されており、その意味については第IV部第1章で検討したい。次に個々の資料の特徴的な点について概要を記す。

#### 1) 糸魚川 939（台帳番号1）

かなり古い資料で全体が煤けており、角も摩滅して丸みを帯びている。軸頭の爪には小さなアラガタが打ち付けてある。台の作りは粗削りで、平面の仕上げも手斧削りの大雑把なものである。台前方の木口には四角い削り跡が2つ並んで残っている。台の中央部に2カ所細長いスリット状の柄穴<sup>ほどあな</sup>が開けてあり、下まで貫通していることから、或いは足踏み的な使用を考えたかもしれないが、穴には縄で擦れたような使用痕はない。支柱手前の縁に2カ所の斜め切込みが残る。器底面の加工時に鉋を固定したものとみられる。後部軸受の上面に注油孔があるが、四角い穴の底に丸い穴が開いているだけのシンプルなもので、蓋はない。後部軸受の内壁には黄銅片を貼ってあり緑青が確認できる。

#### 2) 糸魚川 1026（台帳番号2）

小型で軽い作りのろくろである。台の底面の腐敗が進んでいるだけでなく、もともと台を軽くするための作りを考えたものと思われる。すなわち前部支柱の付け根は75mmの厚みを取っているが（これでも標準より薄い）、胴部ではさらに一つ段差を付けて軸の下を低くしている。結果として厚みは約50mmとかなり薄い。軸受部は段欠き構造に中ツバを設けており、支柱の半円弧の受け側もそれに対応した複雑な細工である。他の地域でも例がないわけではないが多くはない。狙った効果としては安定した回転であろうか。

#### 3) 糸魚川 1947（台帳番号3）

保存状態の良い資料で、台の各面、軸等も平滑で丁寧な仕上げが施されている。後部軸受の穴内壁に黄銅片が貼られており緑青色の錆が付着している。台は非対称のT字部を持ち、爪に向かって左側の台縁は丁寧に丸みを帯びた面取りが施され、使い込まれた光沢がある。綱の引手が足を掛けた痕跡だろう。4本爪の付け根の軸端に径22mmの突起があり、更にその中心に径4ミリの穴が開いている。軸製作の時の作業痕と思われる。

#### 4) 糸魚川 1948（台帳番号4）

台長980mmで、ここの資料の中では最大である。軸は720mmで特に長い方ではなく軸径も55mmと平均的なものである。台は粗削りで、左右対称のT字部のくびれから後方は一段

低く削り取られて薄くなっている。段差は斜めに削られている。台の粗削りな作りと対照的に軸受部は細かな細工が施され、中ツバの付いた段欠き構造である。軸頭はネギ坊主型。

#### 5) 上越 890 (調査台帳番号 5)

早い時期に上越市総合博物館に収集された資料であるが、採集地は糸魚川市大所木地屋であることがわかっている。この資料の特徴は軸径が 75 mm と糸魚川の資料の中では最大であることだ。一方、台長 925 mm は平均的な大きさで、軸長 707 mm も同様である。もう一つの特徴は軸頭の爪にあって、軸頭金輪の径が 48 mm に対して爪の先端の開きが 61 mm もある。つまり先の開いた独特の形状をした爪が 4 本平行に取り付けられているのである。恐らくこのろくろで加工したものは盆や鉢など径の大きい器であったと考えられ、軸径の太さもそれに対応したものである。爪の付け根の中心には長さ 19 mm のかなり大きな木芯が残されているが、爪の補強か、或いは加工材取り付けの最大深度を決めるためのものか。後部軸受には黄銅のメタルが使われている。

#### 6) 金沢 139 (調査台帳番号 6)<sup>(3)</sup>

木質からみて比較的新しい資料である。この資料で特に着目したいのは台前方の木口に残る作業痕である。台の造りそのものがチョウナで成形したものと思われるが木口の両端は特に粗い仕上げで、前方木口はいくぶん斜めに断ち切られている。そのことで木口に残る四角い作業痕がよく確認できる。この痕跡が確認される資料は糸魚川の資料としては 2 点であるが、飛騨、中国地方にも若干あることから後段で比較検討してみたい。また軸の前部だけでなく後端にも金輪がはめられているのも特徴だが、これは軸の割裂を懸念したためではないだろうか。

#### 7) 糸魚川 1015 (調査台帳番号 7)

資料の区分としては足踏みろくろとなっているが、構造そのものは他の手引きろくろと変わらず、軸も木軸であることから調査対象に含めることとした。タテ受型・木軸ろくろで「足踏ろくろ」とされるものには、手引きろくろで使っていたものを足踏みに改変したケースが多いが、本資料は或いは当初から足踏ろくろとして作られたものかもしれない。その理由は台中央の縄を下におろすための穴が大きいことである。改変であれば縄が通る穴二つをそれなりの大きさに開ければ用が足りるところ(「台帳番号 1」参照)、軸の下のを大きく窓枠のように切り落としている。また T 字部もほぼ左右対称で形が角張っている点も他の手引きろくろとは異なる造形である(綱取りが足を掛けるための面取りや丸みがない)。下地を塗った木地を成形するための研ぎろくろとして使われたものではなく、鉋を固定するための作業痕が残ることから、挽物のための足踏みろくろであったと考えられる。軸受が中ツバ付の段欠き構造であることも、単なる研ぎろくろでここまでの精巧な軸受を作る必要はなかったように思う。もし木地製作用の足踏みろくろであれば、糸魚川の木地屋では手引



ろくろから水車ろくろへ移行して、足踏ろくろの時期はなかったとする従来の見方を修正しなければならない。また、この先で話題になる伊沢為次郎の箱根系足踏ろくろとは系統を異にする足踏式の技術があったことになる。いずれにしても限定的使用で一時的なものであったと思われる。

#### 8) 糸魚川 1018 (調査台帳番号 8)

軸のみの資料である。軸長 671 mm、軸径 52 mm。直通の軸で、軸受部は単純な段欠き構造だが明確な角のない、丸みのある段差である。ネギ坊主型の軸頭で、金輪がないのは欠落と思われる。開き幅の狭い 4 本平行型の爪に、小さい木芯あり。

#### 9) 糸魚川 1025 (調査台帳番号 9)

軸のみの資料。軸長 692 mm、軸径 53 mm。全体はほとんど(番号 8)の資料と同じだが、こちらは軸頭と後部軸端の両方に金輪が付いている。軸受は単純な段欠き構造で、軸受と接する部分に明確な段差が付いている。軸頭はネギ坊主型、木芯のある 4 本平行爪である。後部軸端の鉄芯に緑青が付着していることから、本体の軸受は黄銅片が使用されていたことがわかる。

#### 10) 糸魚川 1028 (調査台帳番号 10)

軸のみの資料。軸長 771 mm、軸径は約 58 mm で微妙に変化している。全体に黒く煤けてかなり古いと思われる。前の二つの軸と異なるのは軸頭・軸受部の形状で、ネギ坊主型の意匠的要素がなく、軸受部も片側のみの段欠き構造である。軸受構造は、本体側の丸みの付いた段差部分で軸を受けて、軸頭に向かって径を絞った段差となりそのまま金輪がはめられ、爪になる。軸頭の形状としては同じタイプの物は糸魚川の資料では他にない。他より古いタイプを示しているのかもしれない。(岐阜県高山市大萱の資料に同タイプの軸あり。)

### (2) 糸魚川市大所木地屋の歴史的背景

大所木地屋の歴史は既に詳述したので、ここでは特に彼らの歩いてきた歴史とろくろの関わりを考えてみたい。

大所木地屋は寛政 4 年(1792)に飛騨から越後糸魚川に入って以来、天保 8 年(1837)に大所に集落を形成するまでの 45 年間、信越国境の山を 5 回ほど 2 つのグループに分かれて移住を繰り返していた。その間当然ろくろは持ち運んでいたわけだが、木地屋が移動するときにはろくろの軸だけを外して携行し、台は新たな移住先で作っていたとされる。大きく重い台は、他の家財道具を考えれば持ち運ぶことはできなかったのだろう。残された資料を見れば、軸の部分の精巧で入念な作りと台の粗い作りが対照的なのも理解される。さらに定住後も手引ろくろで仕事を続け大正時代に入ってようやく水車ろくろに移行した。

ここの集落に多くの民具資料が残されていたのは、こうした歴史とともに、平成の時代ま

資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名 テビキクロ	
調査台帳No.	1	原資料No.	939	分類	A-a-3-29
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
					
<div><div>〔資料来歴〕</div><ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者 小掠虎十郎(シタ家)</li><li>・使用者 不詳</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・使用年代 明治中期</li></ul><div>〔保存状態〕</div><ul style="list-style-type: none"><li>・煤の付着がひどい。木部は角が劣化・磨滅し全体が丸味を帯びる。</li><li>・爪に小さな荒ガタを打ち付けたまま。爪の保護のためか。</li></ul></div>					
<div><div>〔観察記録〕</div><ul style="list-style-type: none"><li>・どっしりとした台で、中央部付近に二つの穴が彫られて台下まで貫通している。穴の位置からして綱かベルトを通して足踏みで軸を回転させたとも思えるが詳細は不明。(ろくろ全体のつくりは手引きろくろの形である)</li><li>・軸受部はシンプルな段欠き構造。軸受より前方はほとんど特別の造作がなく、ふくらみもない。</li><li>・軸受の半円弧は中央で明確なV字の溝によって分割され、軸との接触面は4分割された円弧となる。内側の接触面には擦り切れた跡が光ってみえる。</li><li>・軸形は円柱型、軸長755mm、軸径54mm。</li><li>・爪は4本平行型。付け根には突起あり、円柱形の突起で側面にろくろ目。その周りに爪が埋め込まれている感じである。</li><li>・後部軸受には黄銅のメタルがはめ込まれており、緑青(ロクショウ)が付着している。</li><li>・支柱手前側に二段の切り込みあり。付け根近くに和釘(角)が一本打たれている。</li></ul><div>〔基本データ〕 全長940mm 軸長755mm 軸径54mm 重量11.3kg</div></div> <div></div>					



資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館	
調査台帳No.	2	原資料No.	1026 分類 A-a-3-30
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)		
			
<p>〔資料来歴〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者 小掠繁夫 (ヤジロ家)</li><li>・使用者 小掠市太郎</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・使用年代 明治初期</li></ul> <p>〔保存状態〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・台の木質劣化と台そのものが薄い造りであることから、非常に軽いろくろである。</li><li>・台底面の傷みがひどい。</li><li>・台にくらべて軸は保存状態がよい。中央部は平滑で光沢あり。</li></ul>			
<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・軸受部は中段型で緻密につくられている。軸受部のくびれが大きく、先端部のネギ坊主が目立つ。一見するとまるで仏具の一部を見ているような印象である。</li><li>・軸形は円柱型。軸長630mm、軸径49mm。</li><li>・軸受側も細かい細工がされており、軸との接触部分は擦れて光っている。半円弧を分割する溝が深くはっきりとしているので、4分の1円の4点で支えていることがよくわかる。</li><li>・爪は4本・平行型。芯の突起はない。金輪あり。</li><li>・台は他のろくろと比べて目立って薄い。前部軸受の部分から後方は段差2センチで一段低く削られているので一層薄く見える。</li><li>・後部軸受の注油孔付近が大きくくぼんでいる。孔の径も大きめ。</li><li>・鉄芯は赤く錆ており、形状はわずかにテーパ―処理されている。</li><li>・台頭を左にして手前側支柱の角に大きめの切り込みがある。付け根近くには和釘が打ちこまれ、2cmほどの短い部分が台上に折り曲げられて残っている。</li></ul> <p>〔基本データ〕 全長813mm 軸長630mm 軸径49mm 重量6.6kg</p>			

資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名	テビキクロ
調査台帳No.	3	原資料No.	1947	分類	A-a-3-31
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
<div></div>					
<div><div><p>〔資料来歴〕</p><ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者 小掠繁夫 (ヤジロ家)</li><li>・使用者 小掠市太郎</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・使用年代 明治初期</li></ul><p>〔保存状態〕</p><ul style="list-style-type: none"><li>・全体に保存状態は良好。木質の劣化、腐敗等はみられない。</li><li>・前部軸受の支柱固定用の楔は最近の物。</li></ul></div><div><p>〔観察記録〕</p><ul style="list-style-type: none"><li>・各部材がそろっており、典型的な手引きろくろの形を伝える資料である。</li><li>・軸形は円柱型、軸長703mm、軸径55mm。軸全体が滑らかな表面仕上げで、ろくろ目もない。保存状態良好。</li><li>・軸受部はシンプルな段欠き型だが、軸頭側と軸本体側からの両方から軸受部に向かって斜めに細く絞られているのが特徴。</li><li>・軸受はV字形に近い変形半円弧が支柱に刻まれて、軸を挟んだ時に実際に軸に接触する部分は多くない。4分の1円弧のわずかな面で軸を支えている。</li><li>・軸尻の鉄芯はわずかにテーパ加工、油分があつて白色金属光沢あり。</li><li>・後部軸受には黄銅が軸受メタルとしてはめ込まれており、緑青(ロクショウ)の付着が見られる。</li><li>・爪は4本平行型。付け根には径22mmの突起、その芯には小さな穴がある。</li><li>・台は頭部が非対称型、引き手側はなだらかに面取りされ、ツヤがある。</li><li>・支柱手前側に切り込みあり。支柱の付け根近くに洋釘が2本打たれている。</li></ul><p>〔基本データ〕 全長865mm、 軸長703mm、軸径55mm</p></div></div>					



資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名	テビキロクロ
調査台帳No.	4	原資料No.	1948	分類	A-a-3-32
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
					
<p>〔資料来歴〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者 小掠敬一 (マエデ家)</li><li>・使用者 不詳</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・使用年代 不詳</li></ul> <p>〔保存状態〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・全体に煤で黒褐色。鉄部もほとんど錆と煤で同様の状態。</li><li>・支柱上部を結んでいた紐は欠落。</li></ul>					
<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・台は荒削りで、芯持ちの一木造り。</li><li>・軸は使いこまれて平滑で光沢もあるが、全体にろくろ目が残り、当初は荒い仕上げだったと思われる。</li><li>・軸形は円柱型で軸長720mm、軸径55mm。</li><li>・軸尻の鉄芯はわずかにテーパ加工、油分があって白色金属光沢あり。錆なし、緑青の付着なし。</li><li>・後部軸受には黄銅などのメタルは使われていない。</li><li>・軸受部の構造は精巧な中段型。軸受の半円弧(実際は半円弧ではなく、浅い三日月程度)は中央でV字の溝によって分割され、全体では4分の1円弧となっている。</li><li>・爪は4本平行型で、付け根に突起がある。</li><li>・軸頭にはほぼ球形のネギ坊主が付いている。</li><li>・支柱手前側に切り込みあり。支柱の付け根近くに角釘(和釘)が一本打たれている。</li></ul> <p>〔基本データ〕 全長980mm、軸長720mm、軸径55mm</p>					

資料所在地(施設)		新潟県上越市本城町7-7 上越市立総合博物館		地方名	テビキロクロ
調査台帳No.	5	原資料No.	890	分類	F-02
文化財指定等					
					
<div>〔資料来歴〕<ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者 小掠丈助 (ナカジマ家)</li><li>・使用者 不詳</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li></ul></div> <div>〔保存状態〕<ul style="list-style-type: none"><li>・前部軸受は支柱が開いたままで、上部の紐は欠落している。</li><li>・木部の状態からみて比較的新しいと思われる。</li><li>・保存状態は良い。</li></ul></div>					
<div>〔観察記録〕<ul style="list-style-type: none"><li>・軸径が75mmと大所木地屋の資料としては最大。軸形は円柱型、軸長707mm。</li><li>・4本・平行型の爪が独特の形をしている。軸先端部の金輪より外側へ大きく開いている。丸盆や茶びつ等大きな器を挽いたろくろと思われる。</li><li>・鉄芯はわずかにテーパ加工されている。</li><li>・後部軸受には銅のメタルが使われており、鉄芯の回りに巻かれた銅に緑青が付着している。後部軸受の内壁も同様。</li><li>・前部軸受の構造はシンプルな段欠き型。支柱の軸受部分は半円弧の中央部に20mm～22mm幅の溝を浅く掘り、半円弧を分割して4分の1円弧としている。V字の溝でなく、幅のある溝は珍しい。</li><li>・台の造作について、木口面には鋸の目残り、台の側面は荒い手斧削り。</li></ul></div> <div>〔基本データ〕 全長925mm、軸長707mm、軸径75mm</div>					



資料所在地(施設)		石川県金沢市広坂1-1-1 金沢市教育委員会		地方名	テビキロクロ
調査台帳No.	6	原資料No.	139	分類	A1-と-1
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「北陸地方の木地製作用具」(1972)				
					
 					
<b>〔資料来歴〕</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・寄贈者</li><li>・使用者</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li><li>・使用年代</li></ul> <b>〔保存状態〕</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・各部材とも完備</li><li>・保存状態良好</li></ul>				<b>〔観察記録〕</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・軸は比較的新しく、煤や劣化はみられない。綱を巻きつける中央部は平滑で光沢がある。</li><li>・軸頭と軸尻の両端に金輪がはめられている。</li><li>・軸形は円柱型、軸長701mm、軸径52mm。軸受部の前後にはろくろ目が残っている。</li><li>・軸受部の構造は単純な段欠き型。軸受の半円弧は中央で大きい溝によって分割され、全体では4分の1円弧となっている。</li><li>・爪は4本平行型。付け根の突起なし。</li><li>・手前の支柱付け根近くに丸い穴と四角い穴が残されている。</li></ul> <b>〔基本データ〕</b> 全長925mm、軸長701mm、軸径52mm	

資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名	足踏ろくろ
調査台帳No.	7	原資料No.	1015	分類	B-b-1-8
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
				 	
<p>〔資料来歴〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li> <li>・寄贈者 小掠繁夫 (ヤジロ家)</li> <li>・使用者 小掠市太郎</li> <li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li> <li>・使用年代 明治初期</li> </ul> <p>〔保存状態〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体が煤けているが保存状態は良好。</li> <li>・軸先端の爪が一本曲がっている。</li> </ul>				<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ろくろ台の中央が大きくくりぬかれているのが特徴。軸に巻き付けた綱をここから下げて交互に足で踏んで軸を回した。用途は木地磨き用。</li> <li>・軸形は円柱型、軸長740mm、軸径53mm。</li> <li>・鉄芯はわずかにテーパ加工、油分があって白色金属光沢あり。錆なし、緑青の付着なし。</li> <li>・後部軸受には黄銅などのメタルは使われていない。</li> <li>・軸受部の構造は精巧な中段型。軸受の半円弧は中央で明確な溝によって分割され、全体では4分の1円弧となっている。</li> <li>・爪は4本平行型。付け根の突起なし。</li> <li>・支柱手前側に切り込みあり。支柱の付け根近くに洋釘が一本打たれている。</li> </ul> <p>〔基本データ〕 全長903mm、軸長740mm、軸径53mm、重量10.6kg</p>	



資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名	ロクロジク
調査台帳No.	8	原資料No.	1018	分類	A-a-3-33
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
				見取り図なし	
<p>〔資料来歴〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li> <li>・寄贈者 小掠誠一（ムカイ家）</li> <li>・使用者 不詳（小掠誠一家の先祖）</li> <li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li> </ul>				<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・かなり古いろくろ軸である。</li> <li>・軸形は円柱型、軸長671mm、軸径52mm。</li> <li>・鉄芯はわずかにテーパ加工、赤さびが付着。緑青はみられない。</li> <li>・軸受部の構造は極めてシンプルな段欠き型。軸受けの先はネギ坊主型である。</li> <li>・爪は4本平行型。爪の幅が不ぞろい。付け根に突起あり。</li> <li>・軸頭に金輪がない。当初からないのか、欠落したのかはわからない。</li> </ul>	

資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市大字大所 木地屋民俗資料館		地方名	ロクロジク
調査台帳No.	9	原資料No.	1025	分類	A-a-3-34
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
					
〔資料来歴〕			〔観察記録〕		
<ul style="list-style-type: none"><li>・採集地 新潟県糸魚川市</li><li>・寄贈者 小掠誠一（ムカイ家）</li><li>・使用者 不詳（小掠誠一家の先祖）</li><li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所 木地屋</li></ul>			<ul style="list-style-type: none"><li>・かなり古いろくろ軸である。</li><li>・軸形は円柱型、軸長692mm、軸径53mm。</li><li>・軸の後部に金輪がはまっているのが特徴。鉄芯は直棒、白色光沢あり、緑青(ロクショウ)が付着している。</li><li>・軸受部の構造はシンプルな段欠き型。軸受けの先はきれいな球形である。</li><li>・爪は4本平行型。付け根に突起あり、その突起の中央に小さな穴あり。</li></ul>		
〔保存状態〕					
<ul style="list-style-type: none"><li>・全体が煤けて黒い。</li><li>・木質の内部が虫食い等で劣化。</li><li>・軸後部に亀裂損傷あり。</li></ul>					

資料所在地(施設)		新潟県糸魚川市木地屋民俗資料館		地方名	ロクロジク
調査台帳No.	10	原資料No.	1028	分類	A-a-3-35
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「糸魚川木地屋の民具」(2005)				
					
<p>〔資料来歴〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・採集地 新潟県糸魚川市大字大所木地屋</li> <li>・寄贈者 小掠誠一（ムカイ家）</li> <li>・使用者 不詳（小掠誠一家 先祖）</li> <li>・使用地 新潟県糸魚川市大字大所木地屋</li> </ul> <p>〔保存状態〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体にすすけて黒い。</li> <li>・爪や後部鉄芯なども錆と煤が付着している。</li> </ul>				<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・かなり古いクロの軸である。</li> <li>・軸形はほぼ円柱型、軸長771mm。軸径は前部55mm 中央58mm、後部軸端は53mmと変化している。</li> <li>・爪の長さ40mm、4本爪・平行型だが一本欠落している。</li> <li>・軸受部の構造はシンプルな段欠き型。軸受部にはわずかなろくろ目が残っている。</li> <li>・爪の付け根には突起あり。(突起というより低い台状の出っ張り)</li> </ul>	

でほとんどが集落の民家を維持し、納屋や屋根裏の大きな空間の中に長い年月使ってきた民具がほぼそっくりそのまま残されていたという幸運な事情による。従ってこれらの資料が彼らの古文書に記された先住地飛騨の資料とどのようなつながりを示しているか、それは次の章で検討したい。

## 第2節 石川県のろくろ

石川県にはいくつかの有名な漆器産地があり、当然そこには古くから木地屋の来住があった。確認できた二点の資料はいずれもそうした漆器製作の歴史が濃厚な地域のもので、一つは山中漆器のルーツともいわれる真砂のろくろ、もう一点は能登半島の内陸部、合鹿碗で有名な旧柳田村のろくろである。

### (1) 加賀市山中町のろくろ

石川県<sup>えぬま</sup>江沼郡<sup>まなご</sup>真砂村（現加賀市山中町）は大聖寺川の上流奥深くにあった歴史の古い木地屋集落で、その挽物技術は山中漆器のルーツといわれている。村には古いろくろが一台残されており、貴重な資料として現在は山中町の歴史資料館「芭蕉の館」に展示されている。そのろくろは他に例のない独特の構造を持つもので、以下にその概略を紹介する。

#### 1) 綱引きろくろ（山中町真砂）（調査台帳番号 39）

基本構造はタテ受型で台長 740 mm、4 本平行型の爪を持ち、軸は軸径 58～60 mm のほぼ直通の円柱型である。軸受部は段欠き型の変形で、明瞭な角のない U 字形の段をつけた独特の軸受である。後部軸受は一本式だが軸端と軸受の間に薄板を挟んである。この資料の最大の特徴は支柱の構造にある。タテ受型支柱の場合、通例は直立する二本の支柱の向かい合った突き合わせはほぼ直線で、途中に設けられた半円弧で両側から軸を挟んだあと、その上部は若干の隙間を残して細縄で結わえられる。しかし本資料のユニークな点は、支柱上部の突き合わせがジグザグの階段のように細工され、二本の支柱が噛み合うようにして紐で結わえられていることである。さらに爪を正面にして左側の支柱の幅が広く、右側が狭く作られているが二本の高さはまったく同じであること、更にその支柱の上面（木口）に細い溝が二本の支柱を通じて掘られていることである。支柱の幅が左右で異なるものはよく見かけるとしても、それ以外のジグザグ階段状の突き合わせと、上面の溝はまったく他にない特徴で、その意図すら理解できないものである。台形についても特徴があり、基本形はバチ型であるが左右非対称で、左側が前方側面の直線が少ない。

これらいくつかの点で非常にユニークな構造を持つ真砂ろくろは、技術的にまったく周辺のろくろとの接点のない孤立したタイプであると思われたが、実はすぐ近くにまったく同じ特徴を持つ資料があった。能登半島に古くから合鹿碗として知られた漆器産地があり、そこで使われていたろくろが、同じ特徴を持つものであった。



## (2) 鳳珠郡能登町柳田のろくろ

石川県鳳珠郡能登町(旧柳田村)字合鹿<sup>ごうろく</sup>で調査した手引ろくろは、合鹿<sup>ごうろく</sup>碗<sup>わん</sup>ゆかりの寺といわれる福正寺の屋根裏の展示室に収蔵されていたものである。<sup>(4)</sup> その外形は極めて独創的な工夫がみられるユニークなろくろであった。

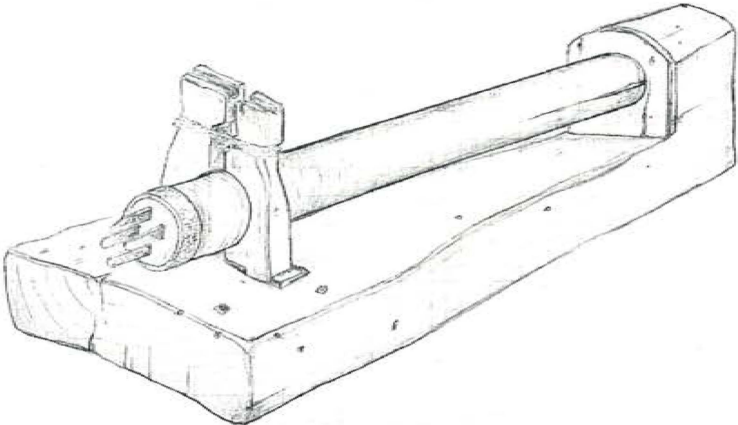
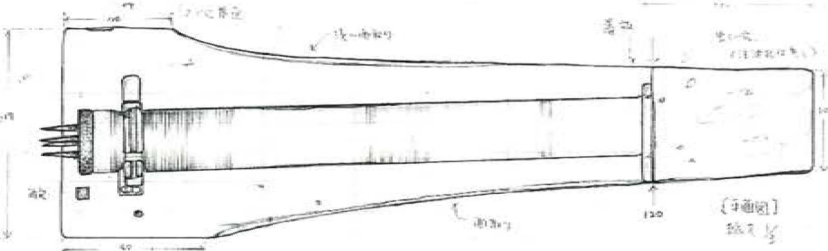
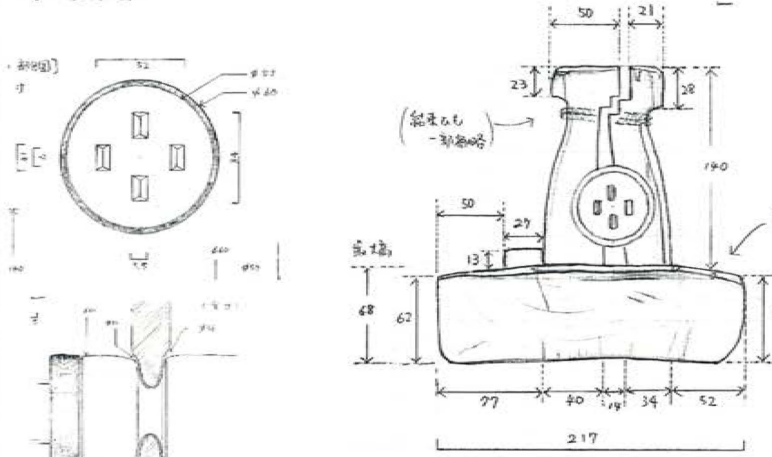
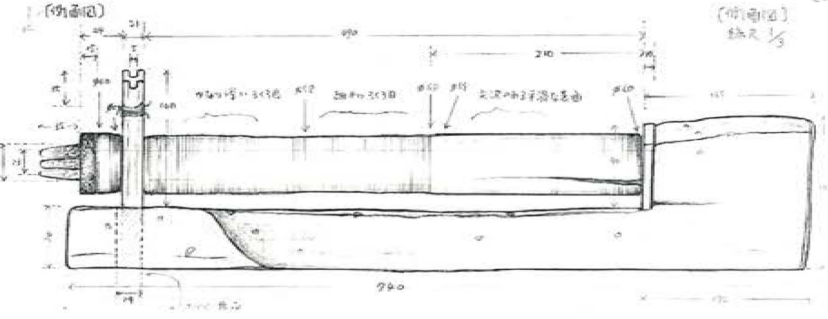
### 2) 縄掛ろくろ(能登町合鹿 福正寺蔵 町指定文化財)(調査台帳番号 58)

基本構造はタテ受型で台は台長 805 mm のくびれの浅いトンボ型、軸は軸径 62 mm のほぼ直通の軸、軸受は中ツバ型の段欠き構造だが、角のある段差ではなく丸みを帯びた造りとなっている。このろくろには他にないユニークな細工が施されており、それらはいずれも二本の支柱にある(次頁に解説図)。一点は支柱上端部(上面)に溝が掘られ、そこに横から細い栈木がはめ込まれていることである。栈木(a)は断面が台形で支柱の溝もそれに合わせてできている。木工の継手のひとつに「蟻掛<sup>ありか</sup>け可動吸付<sup>かどうすいつ</sup>き」という手法があり、<sup>(5)</sup> それを応用したと思われる細かな細工である。横から栈木を入れると途中できつくなり、二本の支柱をしっかりとつなぐ役目をしている。あたかも支柱が一枚の板であるかのようになる。更に支柱に施された二つ目の特徴は、向かい合って接している部分が直線ではなく段差が作られ、かみ合うような構造になっていることである(d)。三点目は、普通のタテ受型ではそれぞれの支柱を台に固定して軸受のはめ合いを調節するためにクサビを両側二箇所に使っているが、このろくろは正面から見て右側の支柱(B)のみクサビ(b)で固定するようになっていることである(ただし現資料ではクサビが失われている)。左側の支柱(A)は台にしっかりと柄組で差し込まれ、きつく固定されている。

こうした独創的な工夫によって二本の支柱は、それ自体幅広で板のような支柱がさらに強固な一枚の板になったかのようなものである。他には見られないこれらの工夫が、何を意味しているのか。推測ではあるが恐らく支柱をより安定させ、台に対して強固に取り付ける、という意図があったのではないだろうか。つまり台に固定した支柱Aに対して、可動支柱Bを段差dの下にもぐりこませることで、上方に抜ける動きを押さえ更に蟻形の横栈を差し込むことで支柱Aと一体化させ、それを細縄で結え、最後にクサビで台に固定するという二重三重の強固な固定方法である。一般的に半円弧をもつ二つの部材を組み合わせて回転軸の軸受を構成する場合、工作機械であれば正確で強力な組み立て、接合が求められる。木地を挽く作業であっても円滑な回転を確保すると同時に、そこには大きな負荷がかかるわけであるから、こうした構造の意図は理解できないものではない。しかし他の地域のろくろには見られないこうした工夫がなぜ合鹿のろくろには必要だったのか、疑問は残る。他の地域のタテ受型ろくろにここまでの構造が見られないという事は、逆に見れば合鹿碗の製作では大きな負荷が回転軸にかかったということの表れかもしれない。合鹿碗はすべてケヤキ材であり、ある時期以降堅く目の詰んだ柾目材を使用していた事、更に普通のお碗より径の大きい器であったという事等に関係するかもしれないが、<sup>(6)</sup> もう少し実証的な検討が必要だろう。いずれにしても、このユニークな構造は同じ石川県の加賀市真砂のろくろ「調査台帳

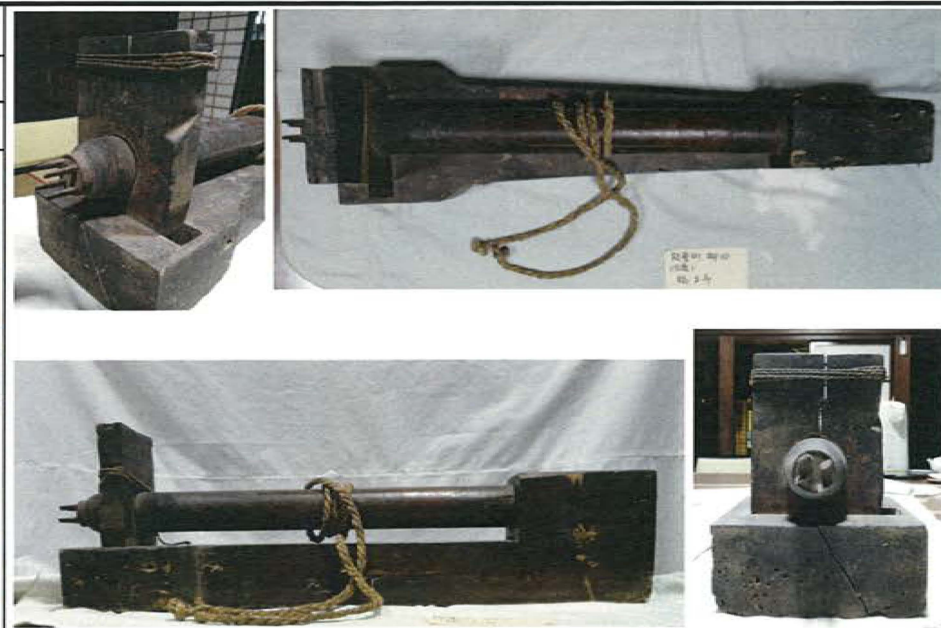
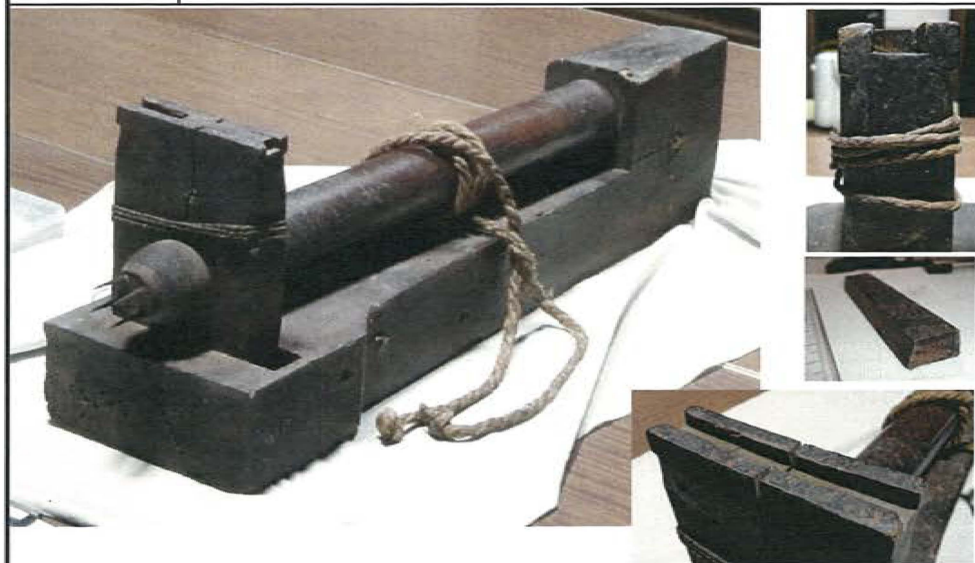


資料所在地(施設)	石川県加賀市山中町 芭蕉の館	地方名 綱引きろくろ	
調査台帳No.	39 真砂ろくろ1		
文化財指定等			
			
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 綱引きろくろ(『山中漆工史』による)</p> <p>採集地 石川県江沼郡旧真砂村</p> <p>〔使用地〕石川県江沼郡旧真砂村</p> <p>〔製作者〕不明</p> <div data-bbox="134 1085 1075 1292">  </div> <p>〔保存状態〕 外観からかなり古い資料と思われるが、木質の劣化等はなく、本体にも欠損はない。虫穴多く、鉄部は赤く錆びている。</p>		<p>〔観察記録〕</p> <p>〈特徴〉 タテ受型ろくろであるが、他では見られない、いくつかの特徴をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軸受の二本の支柱の向かい合った面にジグザグの段差があり、かみ合うように突き合わされている。手前支柱に切込みはない。なめらかな面取。</li> <li>・支柱の上面に細い溝が掘られているが用途は不明。</li> <li>・軸はほぼ直通の円柱型である。軸受部は段欠きの変形、角がなくU字型にくびれている。軸の前半50cmほどろくろ目が残る。</li> <li>・支柱の軸受部も軸のくびれに合わせた形。円弧を分割する溝はない。</li> <li>・爪は4本平行型。軸端には縄かけ部と同じ径の60mm径の金輪あり。</li> <li>・台の形状はパチ型。全体に手斧削りの跡あり、木口も手斧仕上げ。</li> <li>・手前支柱の付け根に2個の角穴あり。うち1個は10×9ミリの大きさ。</li> <li>・後部軸受には注油孔がない。後部軸端と軸受の間に薄板が打ち付けられている。</li> <li>・引き綱の把手が1個あり。鍔(あぶみ)型で、きれいに成形され、使い込まれた美しさがある。</li> </ul> <p>〔基本データ〕 全長740mm、軸長490mm、軸径58mm</p>	

台帳番号	39	石川県加賀市山中(真砂) [芭蕉の館 蔵]	地方名	綱引きろくろ	
<p data-bbox="241 244 380 276">〔見取り図〕</p> 			<p data-bbox="1111 244 1249 276">〔平面図〕</p> 		
<p data-bbox="253 831 369 863">〔正面図〕</p> 			<p data-bbox="1111 831 1249 863">〔側面図〕</p> 		



資料所在地(施設)	石川県能登町柳田字合鹿 (福正寺所蔵)		
調査台帳番号	No.58	資料番号等	縄掛ろくろ I
文化財指定等	町指定文化財		



基本データ＝ 台長805mm 軸長638mm 軸径62mm

#### <観察記録>

- 〔形式・概要〕 特異な構造を持つろくろ。最大の特徴は2本の支柱の造り。支柱の突き合わせ部分に段差があり、かみ合わせてある。さらに支柱の上部に溝が掘られ、横から細い棒がスライド上に差し込まれている。同様の構造は、石川県山中町真砂の資料に見られるが他には例がない。
- 〔軸〕 太さに変化なく、ほぼ直通の軸。ろくろ目なく平滑な表面。縄は後補。
- 〔支柱・軸受〕 支柱はタテ受型、左右で幅が異なる。軸受部は中ツバ型。
- 〔軸頭・爪〕 軸頭はほぼ軸本体と同じ径で特段の意匠なし。爪は4本平行型。
- 〔台〕 基本形はトンボ型だがT字部のくびれが浅く、全体に後部に向かって細くなっている。後部軸受は一木型で注油孔なし。全体に面取りなし。後部軸受上面の面取りは、加工したものではなく自然木の表面形状。
- 〔その他〕 支柱手前の中ほどに深く明瞭な切込みあり。更にその下にも浅い凹みが見られる。支柱を台に固定する方法がユニーク。くさびが欠損しているが、クサビ穴があるのは手前側支柱のみ。一方の支柱はホゾ穴にぴったり差し込まれて、更にホゾの部分が支柱本体の幅より数ミリ狭く切り込まれているため、それ以上深く入らないようになっている。

〔地方名〕 縄掛ろくろ

〔採集地〕 石川県鳳珠郡能登町柳田 合鹿

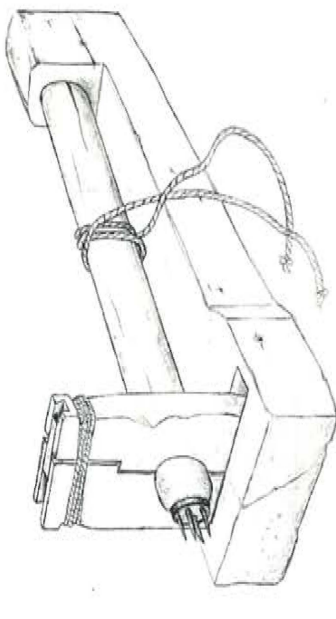
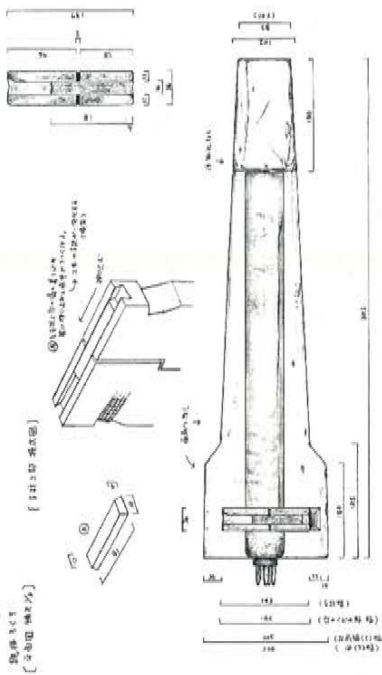
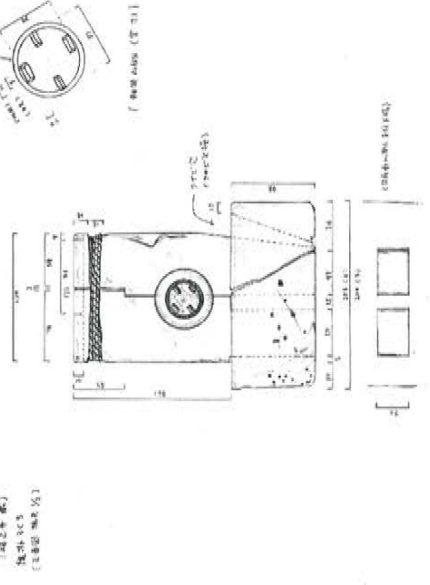
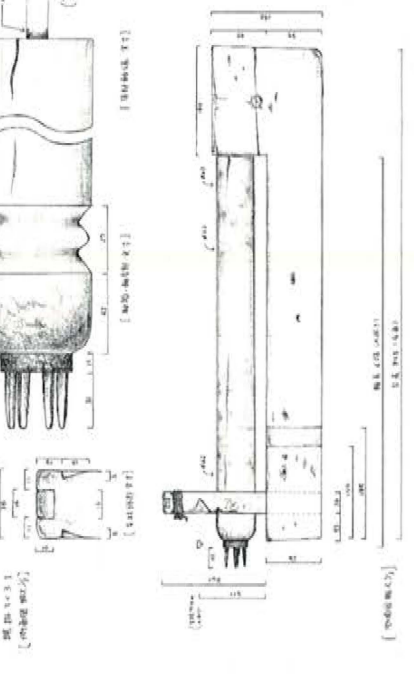
〔製作地〕 〔使用地〕 旧柳田村字合鹿

〔来歴〕

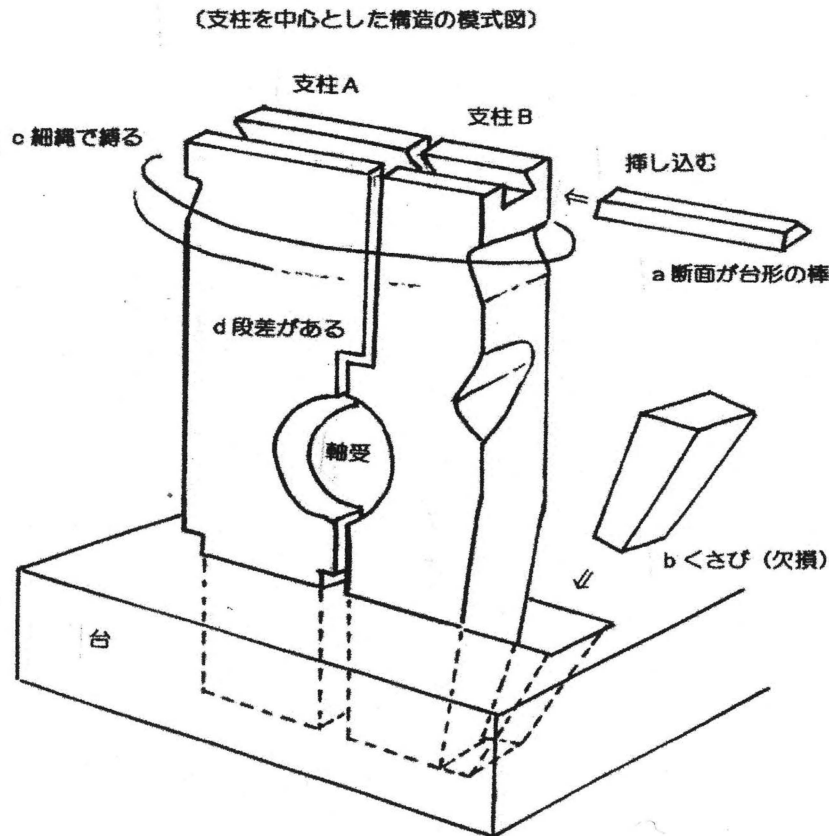
合鹿椀最後の木地師本谷三郎右衛門(昭和5年没)の使用と伝えられる。旧柳田村では23集落のうち11集落に木地師伝承があり合計38か所にも上る。合鹿椀の製作に関係した集落は更に多いと考えられる。合鹿椀は木地屋と塗師屋が未分化の状態で生まれた漆器と言われている。このことからすれば、ろくろの台数は村全体で相当数あったと考えられる。しかし、現存が確認されているのはこの一台のみ。そのことから本資料の学術的価値は極めて高い。

〔保存状態〕

傷みや木質の劣化が少ない。部材の一部に欠損あり。(クサビ、縄)

台帳番号 58	石川県能登町柳田字合鹿	現地名 縄掛けろくろ1	町指定文化財
<div data-bbox="244 1870 276 1982">[見取図]</div> <div data-bbox="311 1254 758 1870"> <p>石川県能登町合鹿 (柳田字合鹿) 縄掛けろくろ 見取図</p>  </div>			
<div data-bbox="244 1019 276 1131">[平面図]</div> <div data-bbox="327 392 774 1086"> <p>石川県能登町合鹿 (柳田字合鹿) 縄掛けろくろ [平面図 横断面]</p>  </div>			
<div data-bbox="829 1915 861 2027">[正面図]</div> <div data-bbox="869 1220 1364 1892"> <p>石川県能登町合鹿 (柳田字合鹿) 縄掛けろくろ [正面図 横断面]</p>  </div>			
<div data-bbox="829 1019 861 1131">[側面図]</div> <div data-bbox="869 347 1348 1086"> <p>石川県能登町合鹿 (柳田字合鹿) 縄掛けろくろ [側面図 横断面]</p>  </div>			

番号 39」とも共通するものであり、またそれ以外の地域の資料にはまったく見られないものである。そのことの意味もまた見過ごすことのできないものだろう。(下図参照)



「調査台帳番号 58」合鹿の資料の支柱構造 (解説図)

### (3) 二つの木地屋の歴史

石川県の二つの地域で、共通する独特の構造を持ったろくろが確認された。注目すべき点は、この二つの資料の持つ特徴が、全国的に見ても他に例がなく、まったく孤立しているという点である。この事を踏まえて二つの村の木地屋の歴史を探ってみた。

まず(調査台帳番号 39)の資料採集地<sup>まなご</sup>真砂村について考えてみたい。真砂は石川県の南西のはずれ福井県の山間地と接する地域にあつて、能登の合鹿とは直線で約 100 km の距離にある。この村は有名な山中漆器のルーツとされていることもあつて、古くから様々な文献に名前が出てくる。『山中町史』(完結編)<sup>(7)</sup>「第三章山中漆器の誕生と発展」の「第一節木地師たちの移住」によれば、越前側から山を越えて加賀領の大日山のふもとに移り住んだ真砂の木地師が山中漆器の始まりであるとしている。更に、真砂木地師が所持する「永禄二年(1559)免許状」がこの地方に三通存在し、それらの照合から真砂木地師が現在の福井県武生市鞍谷轆轤衆の子孫と考えられる、としている。<sup>(8)</sup> 真砂に伝えられるもう一つの御綸旨「天正八年(1580)正親町天皇綸旨」には「吉河鞍谷大同丸保塗師屋轆轤方云々」とあり、



この表記をめぐっては吉河、鞍谷、大同丸という三人のろくろ師と解する文献もあるが、<sup>(9)</sup>上出とおる<sup>(10)</sup>「地名は語る一江沼に於ける轆轤師の動向」<sup>(11)</sup>には「吉河」「鞍谷」「大同丸保」はそれぞれ地名で、「吉川(=吉河)」は鯖江市朝日町付近、「鞍谷」は鞍谷御所といわれる所、「大同丸保」は「大同」が地名で「丸・保」は村の意、大同は鞍谷の近くの小字あるいは南条町の大道か、としている。<sup>(12)</sup>

いずれにしても近江系統の轆轤師が福井県武生市の鞍谷に一つの拠点を形成し、その中の一派が山を越えて越前から加賀領に入り真砂に住み着いたというのが大方の見方だ。福井県の南条、今立、大野の各郡、大野市、勝山市一帯には多くの木地屋地名が存在し、現に木地屋集落の伝承を保持しているところも多い。ある時期ここに多くの木地屋が入り込んでいたことは間違いなく、その中から峠を越えて加賀に入る者がいても不思議はないのである。こうした真砂木地屋の歴史については他にも『木地師の習俗一新潟県・石川県』、『西谷村誌』などにも同様の記述があり、特に『西谷村誌』に紹介されている「川上から流れて来たお椀」によって真砂村を見つけた話は伝説の一つのパターンを示して興味深い。

真砂木地屋の移住の時期については、はっきりしたことはわかっていないが前出の「地名は語る一江沼に於ける轆轤師の動向」では真砂の木地屋が所持する文書等の時代を手掛かりに、元和年間(1615~1623年)ころに何回かに分かれて入山していると述べている。<sup>(13)</sup>『山中漆工史』はもう少し早い時期、すなわち天正八年(1580年)の正親町天皇綸旨の年代と変わらない時期としている。<sup>(14)</sup>いずれにしても最も早い蛭谷の氏子駆開始の時期(1647年)よりも古いことに注意しておきたい。更に、彼らが所持する御綸旨がいずれも近江の国の二つの神社が木地屋の支配機構を確立する以前の年代を持つことも見過ごすことはできない。そしてやはり注目すべき点は、加賀・能登・越中の木地屋は江戸時代から明治まで一度も氏子駆を受けていないということである。

さて、もう一方の(調査台帳番号 58)の採集地、旧鳳至郡柳田村<sup>ふげし</sup>の木地屋の歴史についてみてみよう。

石川県鳳至郡柳田村(現鳳珠郡能登町<sup>ほうす</sup>)は古くから合鹿椀<sup>ごうろく</sup>という独特のお椀の産地として知られている。この合鹿椀については旧柳田村が、村の文化財関係者や漆器工芸の専門家で調査チームを作り平成元年以降数回にわたる現地調査を実施している。平成5年には『合鹿椀』というタイトルで椀の詳細写真と調査報告を収録した大判の写真集を刊行している。

この写真集(報告書)によって以下に合鹿椀の歴史を略述する。<sup>(15)</sup>

合鹿椀の起源は定かではないが文献上の古い記述では、寛文10年(1670)の「能州鳳至郡五十里村物成之事」に漆が小物成として挙げられている。また木地挽きについては元禄7年(1694)「農隙所作村々寄帳」にその存在が記されている。しかし製品として「合鹿椀」の名が記されたのは安政4年(1857)『諸物賣買直段等書上申帳』が最初である。合鹿椀の基本的な性格は日常使いの素朴な木地椀であったとされており、前記の漆の記録や木地屋の活動から見てかなり古くから漆器椀は製作されていたと考えられる。ただ、その製作形態については木地屋と塗師屋が未分化な状態であったと思われる。漆器産地としての形態が

整い近郷に移出するようになったのは前記『書上申帳』から判断して江戸後期とみられる。その後近代に入って漆器碗の生産が衰微し輪島への木地の供給地としての役割に変わっていき、明治期には合鹿碗は衰退することとなる。

この合鹿碗製作の元となった木地屋がどこから来て、どのような系譜をもつ人たちであったかはいまだに明らかになっていない。『石川県鳳至郡誌』<sup>(16)</sup>（大正12年）には、合鹿碗は越中魚津から能登に渡った木地屋が合鹿に移住して轆轤細工を作り始めたのが最初であるとの記述があるが、村による調査の結果この説は否定され、能州木地師の来歴は不明であるというのが結論であった。ただ、いずれにしても近江の神社による氏子狩が始まる以前からの古い歴史を持つものと考えられている。（以上『合鹿碗』による要約）

こうした歴史を持つ合鹿碗は、多くの古美術愛好家や工芸関係の専門家から注目され、今ではかなり詳細なデータが蓄積され、お碗は文化財として保護されている。しかし、このお碗を作るために使われた道具についてはなぜか関心が低く、村の調査報告書の聞き取りの記録にも「ろくろが裏庭に捨てられていた。」という話がいくつか出てくる<sup>(17)</sup>。従ってその現状も不明で研究も進んでいないのが実情である。貴重な資料の所在確認につながったのは一枚の写真が契機であった<sup>(18)</sup>。

ただ、合鹿村で確認できる木地挽きに関する最も古い記録が元禄7年（1694）の『農隙所作村々寄帳』に記された「一、木地挽申候 宇出村源五組 合鹿村」であるということは、17世紀初頭の真砂をめぐる木地屋の動きと突き合わせて検討する必要があるのではないだろうか。また、『石川県鳳至郡誌』の魚津からの木地屋の来住を伝える一文についても、村の調査では魚津の漆器関係者からの聞き取りで否定したが、今一度再検討の必要がないのだろうか。村の調査では漆器の歴史と木地屋の歴史を同一視して判断をしているようにも受け取れるのである。

#### （4）2つのろくろを繋ぐもの

ここで文献から離れて、もう一度合鹿のろくろと真砂のろくろの構造および形態を比較してみたい。

調査No.	所在地	名称	軸受部	軸尻部	軸形	軸径 mm	軸長 mm	台長 mm	爪取 付部	爪数	爪向	支柱	支柱 切込	支柱 元釘	軸受 細部	台形	台尻	注油孔
39	石川県加賀市 真砂村	綱引ろくろ				58	490	740		4			なし	痕跡				
58	石川県能登町 合鹿	縄掛ろくろ				62	638	805		4				なし				

比較一覧表の項目で見れば、軸形が円柱型、爪数・爪向は4本・平行型、支柱はタテ受型、注油孔なし、と共通する特徴が並ぶ。台形がアイコンでは異なるが、合鹿のろくろはT字型といっても切込みはわずかで、台尻に向かって斜めに細くなっているのが真砂のパチ型に

極めて近いといえる。しかし何といてもこの二つのろくろで他にはないユニークな特徴は支柱の構造にある。比較アイコン上ではタテ受型としか表現できないが、二本の支柱の突き合わせ部分に段差が作られ、それがかみ合わせになっている点である。面白いのは真砂のろくろでは、その段差が二段になっていることである。実に凝った細工である。そして軸頭を左にして手前側の支柱が段差の下にもぐっており、かつ支柱の幅が奥の支柱より細い点も同じである。異なるのは支柱正面から見て真砂の支柱は紐で縛る部分が大きくくびれており、支柱幅も絞られている点である。また、他にはない共通の特徴として支柱上部の溝がある。合鹿の支柱では小さな横棧の部材が差し込まれ、二本の支柱を結合していたが真砂にはその横棧がない。恐らく欠損と思われるが溝の形状は「蟻掛け」という溝の断面が台形になる細工が確認された。こうした二本の支柱を貫く溝があるのはこの二つのろくろだけの特徴である。この特徴が国内他の地域にはまったく例がなく、この石川県内の二地域にだけあるということをどう解釈するか。さらにもうひとつ共通するのは引綱の把手の形がどちらも<sup>あぶみ</sup>鐙型をしていることだ。<sup>(19)</sup> これも決して多い型ではなく二つの資料を結びつける共通の特徴に数えていいだろう。

現代では家庭用木工旋盤で小物を挽くのは趣味の領域に入っているが、かつてはろくろを使って挽物を作るというのは極めて特殊な職能であった。それこそが長い間木地屋が独特な技術と道具を占有し、日本の山々にその足跡を残してきた所以である。従ってその技術は代々変わることなく受け継がれてきた。少なくとも近代に入るまではそうであった。

職人の技術が持つ保守的な性格は同時にその道具にも反映すると考えられる。ある技術集団が共通して持っている技術の傾向は、当然その道具にも反映する。一方、木地屋のように移住生活を繰り返している集団はしばしば分散して新天地を求めていたことは従来の木地屋研究でも明らかになっていることである。これらの点を考え合わせれば、むしろ真砂と合鹿の木地屋がまったく無関係の存在であるという方が不自然ではないだろうか。二つのろくろを比較して判明した構造の類似性は、そう語っているのである。

## 第2章－第2節 〔注〕

(1)ここでは「木地屋」が地名となって定着しており、国土地理院五万分の一の地図にも

「木地屋」と表記されている。(2018の春、最後の住人がいなくなり、集落としては消滅した。)

(2)会津地方と県境を接する新潟県下越地方の東蒲原郡鹿瀬町豊実には蛭谷氏子狩を受けた木地屋がいた(梅の木平木地師)。蛭谷氏子駈帳の第21号(嘉永2年・1849)と24号(安政4年・1857)にその名を残す。これは西会津の山を越えて越後に入った木地屋で4戸の小集団であった。このほかに、やはり江戸末期の天保年間に中越の北魚沼郡入道村にも木地屋の足跡がある。こちらは地元の事業者が会津の木地師二人を雇い入れて漆器業を営んだことによるもので、嘉永3年には会津へ戻っている。

(福島県田島町教育委員会 2001『木地語り』p127～130)。

- (3)「調査台帳番号6」も昭和46年に糸魚川市大所木地屋から採集され、石川県の民間事業者所有の資料として昭和47年に「北陸地方の木地製作用具」の一つとして国の重要民俗資料に指定されている。長年金沢市内の民間テーマパーク内の施設に展示されていたが、その後指定物件は一括金沢市に移管され、現在は金沢市教育委員会によって所蔵されている。詳細は不明であるが糸魚川市大所木地屋の資料はこれ1点のみであり、また同コレクションの中に足踏ろくろ、水車ろくろが複数点あるのに対して手引ろくろは本資料1点であることから、恐らく収集者は北陸地方の範囲を拡大解釈してでも「手引きろくろ」をコレクションに加えたかったという事情が推測される。
- (4) 福正寺はその創建当初から合鹿の木地屋と縁が深く、「合鹿椀の寺」として知られた古刹で、他にも合鹿椀など関係資料を多く所蔵展示している。
- (5) 鳥海義之助『図解 木工の継手と仕口 (増補版)』80頁 オーム社 2016年1月
- (6) 荒川浩和「合鹿椀系譜考」『合鹿椀』202頁 柳田村 1993年3月
- (7) 西島明正『山中町史』(完結編) 加賀市 2006年3月
- (8) 同上 178頁
- (9) 『江沼郡誌』(江沼郡役所 1925年)ではそれぞれ近江から来た3人の人物としているが、柳田国男『史料としての伝説』では、(吉河、鞍谷は)「加賀で説明するように人の名ではなく、九谷の奥山へ越えてきたのは、大同丸一人らしいのである。」と記している。「吉河鞍谷大同丸保」という記述の解釈は研究者を困らせているようだ。
- (10) とおる＝漢字表記は整の字から正を除いた勅の旧字体。便宜的にひらがなとした。
- (11) 『えぬのくに』第44号 p42～56 江沼地方史研究会 1999年
- (12) 同上 51頁 (地名の同定については異説もある。)
- (13) 同上 50頁
- (14) 山中漆器漆工史編集委員会『山中漆工史』p14 山中漆器商工業協同組合 1974年
- (15) 荒川浩和「合鹿椀系譜考」1993.3『合鹿椀』p183～186 柳田村
- (16) 石川県鳳至郡役所 1923.3『石川県鳳至郡誌』p1025 石川県鳳至郡役所  
「合鹿椀は、三百年前越中魚津町の角善左衛門なる者、合鹿に移住して轆轤細工を開始し、椀・捏鉢・水杓等を遠く北海道に至るまで輸出し、米作以外無二の生業となりしかば、戸数の九分まで之に従事せしも、今は全然衰頽に帰せり。」
- (17) 瀬戸久雄「合鹿椀聞き書」『合鹿椀』p274～275  
『合鹿椀』150頁には「関連図版」として三台の「縄掛轆轤」が掲載されている。いずれも所有・所在情報はないが照合の結果、一つは福正寺のもの(今回調査済)、もう一つは『漆の文化史』所収のもの(柳田小学校の旧校舎に収蔵との情報もあり現在所在確認中)、最後の一点は支柱部分が欠損した資料で所在不明である。
- (18) 四柳嘉章 2009.12『漆の文化史』p162 岩波新書  
本書に掲載された写真のろくろの構造が真砂の資料と同じ特徴を示していたことが今回の調査の発端であった。当該資料の所在について著者及び能登町教委に確認した



が何れも所在不明との回答であった。所在を把握できたのはそれとは別に能登町の真脇遺跡縄文館の館長から教示頂いた福正寺所蔵の資料であった。

- (19) ろくろの軸に掛けた引き綱の両端は、引手（女性の仕事）が握って力を入れやすいように把手などの工夫をする例が多い。ろくろ本体が残っていても引綱が残ることは少なく、その把手まで残されている例は大変貴重である。この部分の事例としては、丸い木製の輪、鐙型の輪、鼓型の短い棒を括りつけるタイプ、綱の端を結んで拳状にするタイプ等を確認している。ろくろ使用時の綱は消耗品であるから、軸に綱が巻き付けてある資料であっても後の補足品（市販品）であることが多い。